

# 御会式展





御会式とは何か？

「おえしきとはなにか？」

この問いに辞書や関連書籍に答えを求めると、大体次のようなものが模範解答として用意されている。

十月十三日の日蓮忌日に修される法要のこと。もともとは法会の儀式の略で会式と言った。本来は特に日蓮宗に限った言葉ではないが、御会式と言うと日蓮宗のそれを指す場合が多い。

全国各地の寺院で営まれるが、なかでも宗祖臨終の地である池上本門寺のものが最も有名で、連夜にあたる十月十二日には万灯練り供養（万灯行列）があり、全国から集まった数十の万灯、数十万の群衆で池上の町は夜遅くまで賑わう。

しかし、一般的に「(池上の)お会式」が指すものは法要自体ではなく十月十二日の万灯練り供養である。それは何故か？ という疑問にはどこに答えを求めてもまず答えはない。残念なことに先行研究が無いに等しく、わずかに言及された「御会式」は、偉い学者先生が高層階から望遠鏡で下々の生活を覗いて想像したような内容で、およそ地に足のついたものではない。

本来、万灯練り供養というのは分けて名称を付けられるようなものではなかった。あくまでお参りに来る人達（講という集まりを作って参詣したのは他の伊勢詣りや大山詣りなどと同様である。）が万灯を持ってきただけであって、お寺が主催した行事として万灯練り供養というものがあつたわけではない。ただの御会式参詣客の一部を分別して、そのお参りの様子を名付けたのだ。（いわば初詣に並ぶ客を指して初詣行列とか名前を付けるようなものである。）それがいつしか御会式の一部としてお寺側の宣伝に利用され、気がつけばお寺が主催する行事のようにどちらも（お寺も参詣側も）錯覚して、誤認したまま現在に至る。

そして「御会式」の一部分としての「万灯練り供養」が出来てしまったことで誤認は加速する。「万灯練り供養」は「御会式」に行われるもの。という常





識である。

あくまでお参りに来る人達が万灯をくと書いたが、これらの人はなにも御会式だけに参詣したわけではなく、千部会や寺院の守護神祭などの様々な行事をはじめ、出開帳の送迎から期間中の日参と度々出掛けて行った。当然静々としたお参りの人だけでなく、手には太鼓、幟旗……というものであったから、その過程を考えれば「万灯練り供養」というのは「御会式」にだけ——というの誤りであることがわかる。

残念ながら現在では講を新たに作ってお参りへという動きは皆無で、わずかに残る参詣を主とした講に限らず、特定の行事を支える講や題目講まで、あらゆる種類の講自体が高齢化で後継者がおらず減少の一途である。つい先日も百年以上の歴史を誇った牡丹餅講（龍口法難会に牡丹餅を供養する役目の講）が解散した。様々な行事はそこに参加する人がいてはじめて成り立つ。このような特別な役目のある講（役講という）の解散、つまり参加者の減少は行事そのもの、延いてはその主体である寺院の衰退につながる。その行事を構成する要素を取り除いては成り立たないのは、人間の身体から骨を取り除いては立てないようなものである。

このような状況にあつて、いわゆる万灯練り供養の参加者である万灯講は比較的残っているほうだろう。戦禍により一時は壊滅的な状態に陥るも、まだ多少の古い時代の生き残りがいたことにより継続し、その後のお祭り復興の流れに乗り「昔やってた」という講の復活や新規に立ち上げる若者達がいた。またちようど七百遠忌という、戦後始めて迎える大きな節目があったのも後押しとなり、その前後には戦後最高潮の盛り上がりを見せることになる。もともと苦情が付きものほど目立つ法華のお参りである。他が衰退するなかで一層際立って目立つそれが「御会式」の「万灯練り供養」となるのは仕方がないことだったのかもしれない。

本展では、今まで全く見向きもされなかったそれら「参加者」が主役である。願わくば代々の惣講中、会場に遊び昔話に花を咲かせんことを。

## 凡例

- ・この図録は、二〇二二年十月十一日（火）から十二日（水）まで、大田区立池上会館で開催される「御会式展」の目録である。
- ・作品番号は展覧会場での陳列番号と一致するが、陳列の順序とは必ずしも一致しない。
- ・掲載展示作品はすべて御会式文化研究会の所蔵である。
- ・御会式年表の作成には日蓮宗新・電子聖典所収の各年表を参考にした。







1 高祖日蓮大菩薩御涅槃図

一 弘長元年辛酉五月十二日伊豆國被流御年四十

預伊東八郎左衛門尉造立正安國論一卷奉最明寺入道故也

同三年二月廿二日赦免

一文永八年辛未九月十二日被流佐土島御年五十

預武州前司依極樂寺長老良親房訴狀也訴狀在別紙

同十一年甲戌二月十四日赦免

同五月十六日甲斐國波木身延山隱居地頭南部六郎入道

一 弘安五年丙午九月十八日武州池上入御地頭衛門大夫宗仲

同十月八日本弟子六人被定置此狀六人面可帶云云日興一筆也

定

一 弟子六人事不次第

一 蓮花阿闍梨 日持

一 伊與公 日頂

一 佐土公 日向

一 白蓮阿闍梨 日興

一 大國阿闍梨 日訓

一 弁阿闍梨 日昭

右六人者本弟子也仍為向後所定如件

弘安五年十月八日

同十三日辰時御滅御年六十一 即時大地震動

同十四日戌時御入棺日詔子時御葬也

一 御葬送次第

先 火 二郎三郎 鎌倉位人

次 大宝花 四郎次郎 駿河國富士  
上野位人

次 幡 左 四條左衛門尉  
右 衛門大夫

次 香 富木五郎入道

次 鐘 太田左衛門入道

次 散花 南条七郎次郎

次 御經 大学亮

次 文机 富田四郎太郎

次 佛 大学三郎

次 御はきもの 源内三郎 御所御中間

次 御棺 御輿也

前陣

大國阿闍梨

左

侍從公  
洛部公  
下野公  
蓮花闍

右  
出羽公  
和泉公  
但馬公  
卿公

左  
信乃公  
伊賀公  
攝津公

後陣  
弁阿闍梨

右  
丹波公  
太夫公  
筑前公  
帥公

次 天蓋  
太田三郎左衛門尉

次 御大刀  
兵衛志

次 御腹卷  
権地四郎

次 御馬  
龜王童  
滝王童

一 御所持佛教事

御遺言云

佛者 釈迦 墓所傍可立置云云  
立像

經者 私集最要文  
名註法花經

同籠置墓所寺六人香花當番時

可被見之自余聖教非沙汰之限云云

仍任御遺言所記如件

弘安五年十月十六日 執筆日興 花押



(部分)

3 新版日蓮聖人御一生記



日蓮大菩薩御一代記

繪入

所延山より同世日は法を説く版田は海に在り  
湯の平世日は年返世日は母の南條七郎の家  
又月より延山同世九月に日法正統を創む早九月堂に



1283年	弘安六年	諸弟子檀那、身延に集りて宗祖の小祥忌を営む
1288年	弘安十一・正応元年	日持・日淨願主となり池上に祖師像を造立す
1294年	永仁二年	日昭、七回忌報恩の為、経釈秘抄要文を書す 門人等、十三回忌を身延山等に修す
1314年	正和三年	中山日祐、十七歳にして始めて身延に参詣、時に三十三回忌に遇う
1321年	元応三・元亨元年	日印、別に長勝寺に御命講を修す
1381年	南／天授七・弘和元年 北／康暦三・永徳元年	京都本国寺、百年報恩会千部を修す
1391年	南／元中八年 北／明德二年	日什、奥州会津黒川安芸阿闍梨日意の坊へ着、御影講を修す
1431年	永享三年	京都本国寺は百五十遠忌を修し、諸国末寺登山して千部大法会を行つて報恩す
1481年	文明十三年	京都本国寺、二百遠忌を修す、法会式先規の如し、詣者群をなす
1531年	享祿四年	京都本国寺、二百五十遠忌を修す、報恩会先格の如し
1581年	天正九年	三百遠忌を修す
1588年	天正十六年	徳川家康、身延山会式関を免許せしむ
1601年	慶長六年	加藤清正、池上本門寺大堂を寄進す
1631年	寛永八年	三百五十遠忌を身延山等に於て執行す
1663年	寛文三年	「増山井四季之詞」に、御影講（十月）十三日日蓮上人忌日
1681年	延宝九・天和元年	身延久遠寺四百遠忌法要を修し十講役人・講者を定む
1688年	貞享五・元禄元年	菊鶏頭切尽しけりおめいこう（松尾芭蕉・尚白宛書簡）

一 念免除の付僧房所係し不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>成<sup>レ</sup>儀酒子  
 一 壇下日市場武田信玄山平<sup>ノ</sup>因入<sup>レ</sup>成<sup>レ</sup>者お遠子  
 一 尚<sup>レ</sup>古<sup>レ</sup>念<sup>レ</sup>云<sup>レ</sup>系<sup>レ</sup>信<sup>レ</sup>等<sup>レ</sup>五<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>没<sup>レ</sup>ホ<sup>レ</sup>念<sup>レ</sup>除<sup>レ</sup>子  
 石<sup>ノ</sup>鷹<sup>ノ</sup>知<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>佛<sup>レ</sup>法<sup>ノ</sup>男<sup>ノ</sup>勅<sup>レ</sup>行<sup>レ</sup>者<sup>ノ</sup>也

天正十八年八月廿二日

秀吉御直判

源家康公御制札云曰

甲列身延山久遠寺

- 一 寺中へ於敷生林<sup>ノ</sup>行<sup>レ</sup>本<sup>レ</sup>念<sup>レ</sup>除<sup>レ</sup>子
- 一 古<sup>レ</sup>布<sup>ノ</sup>等<sup>ノ</sup>若<sup>レ</sup>法<sup>レ</sup>没<sup>レ</sup>但<sup>レ</sup>回<sup>レ</sup>經<sup>レ</sup>例<sup>レ</sup>念<sup>レ</sup>除<sup>レ</sup>子<sup>ノ</sup>法<sup>レ</sup>度<sup>レ</sup>下<sup>レ</sup>
- 一 如<sup>レ</sup>夫<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>如<sup>レ</sup>大<sup>レ</sup>坊<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>身<sup>レ</sup>延<sup>レ</sup>子
- 一 大<sup>レ</sup>坊<sup>ノ</sup>若<sup>レ</sup>僧<sup>レ</sup>房<sup>ノ</sup>に<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>友<sup>レ</sup>人<sup>ノ</sup>に<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>令<sup>レ</sup>雖<sup>レ</sup>酒<sup>レ</sup>子<sup>ノ</sup>家<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>子<sup>ノ</sup>被<sup>レ</sup>
- 一 俗<sup>レ</sup>衆<sup>ノ</sup>控<sup>レ</sup>威<sup>レ</sup>子
- 一 彼<sup>レ</sup>國<sup>ノ</sup>中<sup>レ</sup>久<sup>レ</sup>遠<sup>レ</sup>子<sup>ノ</sup>若<sup>レ</sup>法<sup>レ</sup>没<sup>レ</sup>但<sup>レ</sup>回<sup>レ</sup>經<sup>レ</sup>例<sup>レ</sup>念<sup>レ</sup>除<sup>レ</sup>子<sup>ノ</sup>法<sup>レ</sup>度<sup>レ</sup>下<sup>レ</sup>
- 一 若<sup>レ</sup>法<sup>レ</sup>没<sup>レ</sup>但<sup>レ</sup>回<sup>レ</sup>經<sup>レ</sup>例<sup>レ</sup>念<sup>レ</sup>除<sup>レ</sup>子<sup>ノ</sup>法<sup>レ</sup>度<sup>レ</sup>下<sup>レ</sup>

一 有<sup>レ</sup>退<sup>レ</sup>放<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>上<sup>レ</sup>五<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>子<sup>ノ</sup>詳<sup>レ</sup>容<sup>レ</sup>子<sup>ノ</sup>事  
 一 念<sup>レ</sup>式<sup>ノ</sup>圖<sup>ノ</sup>先<sup>レ</sup>詳<sup>レ</sup>子<sup>ノ</sup>月<sup>ノ</sup>當<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>身<sup>レ</sup>延<sup>レ</sup>山<sup>ノ</sup>法<sup>レ</sup>末<sup>レ</sup>子<sup>ノ</sup>中<sup>レ</sup>及<sup>レ</sup>  
 念<sup>レ</sup>除<sup>レ</sup>子

若<sup>レ</sup>佛<sup>レ</sup>承<sup>レ</sup>願<sup>レ</sup>當<sup>レ</sup>干<sup>レ</sup>お遠<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>代<sup>レ</sup>肯<sup>レ</sup>係<sup>レ</sup>佛<sup>レ</sup>法<sup>ノ</sup>真<sup>レ</sup>意<sup>ノ</sup>無<sup>レ</sup>意<sup>ノ</sup>悞  
 佛<sup>レ</sup>行<sup>レ</sup>要<sup>レ</sup>也<sup>ノ</sup>仍<sup>レ</sup>お詳<sup>レ</sup>子

天正十六年十一月十一日

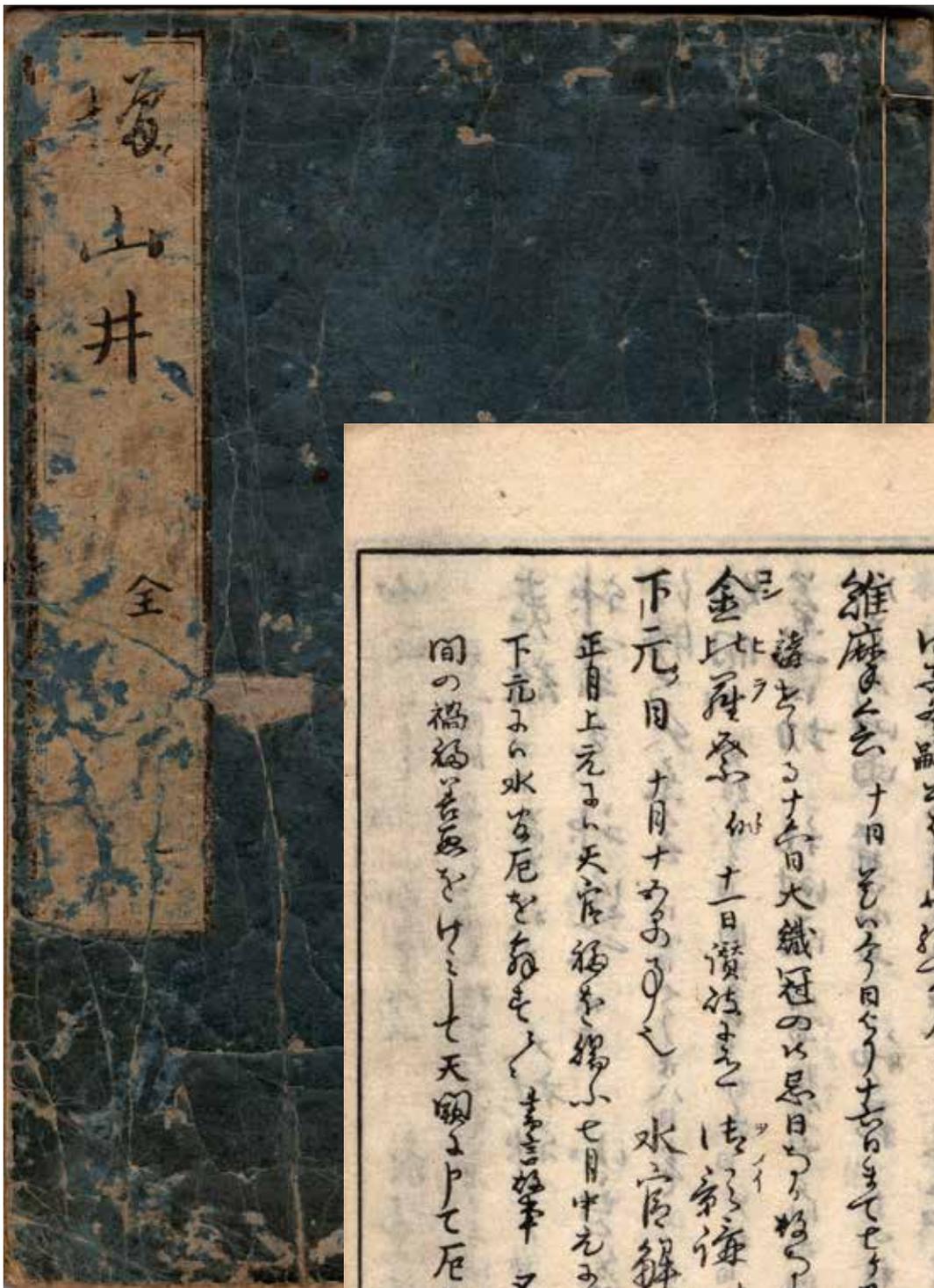
家康公御直判

新代は海制北に打ちききし海直御判御事有る  
 公が家御代の傳軍家より。み子石三多し海寄進の有  
 一の傍ありといふも。遠見の故ある事あり。又波来井乃  
 先祖代より事くさる中さる。越後六郎實長乃経理ら  
 人皇五十六代清和天皇帝王又一品式部卿貞純親王  
 其子より  
 六孫王經基  
 伊福守頼基  
 遠見黒源太清光  
 新代二郎光光



新刊

みのぶかむしと



魚福の法華会考 六日 九月廿日とて 七十三日の乃道田巻にて妙法の  
 大意を完うしむ是に十月六日長巻大段内磨の以忌日之内磨乃  
 法子を嗣公とてしむるなり とも  
 維摩の法 十日 是の法日なり 十一日 是の法日なり 十二日 魚福の法 維摩の法  
 諸を以てする十日 大織冠の以忌日なり 十一日 是の法日なり 十二日 是の法日なり  
 金比羅の法 十一日 是の法日なり 十二日 是の法日なり 十三日 日星上人忌日  
 下元日 十月十九日ありし 水官解厄  
 正月上元より天官福を賜ふ 七月中元より地官厄を赦す 十月  
 下元より水官厄を赦す 又云 水官主福而司人  
 間の禍福を善惡をけりて 天國より厄を赦す

1689年	元禄二年	今年より明年にわたり、多古妙光寺祖師江戸へ出開帳す、二十一世日修代
1690年	元禄三年	「江戸惣鹿子」に、十月十三日日蓮聖人御影供、江府の法花寺仏壇かがやかし諸物供物捧奉る
1694年	元禄七年	幕府、念仏講・題目講を町屋に行う事を禁す
1696年	元禄九年	御命講や油のやうな酒五升（松尾芭蕉・芭蕉庵小文庫）
1697年	元禄十年	「国花万葉記」に、十月十三日日蓮御影
1707年	宝永四年	富士山噴火
1716年	正徳六・享保元年	身延宗祖会の差定に就て、甲府遠光寺日述より始経役出仕の問題起る
1719年	享保四年	越中黒瀬本法寺、宝物の法華曼荼羅絵を江戸に出開帳す
1721年	享保六年	池上は宝永七年火災後の復興の為、二本榎承教寺への出開帳を寺社奉行より許さる
1722年	享保七年	池上本門寺は承教寺に出開帳す
1723年	享保八年	池上本門寺二十四世日等、徳川吉宗の許しにより祖師堂を再建す
1729年	享保十四年	京都本圀寺釈尊像、江戸法恩寺に出開帳す
1731年	享保十六年	京都本圀寺盛大なる四百五十遠忌を修す
1735年	享保二十年	池上本門寺日顛、四百五十遠忌に当り宗祖和讃一篇を著す
1740年	元文五年	九月二十八、二十九日及び十月一日から十三日まで、池上本門寺に四百五十遠忌を修す 身延に於て法華十講の講師及び問者を定め、七日間四百五十遠忌を修す 「続江戸砂子」に、十月十三日御影講、日蓮宗諸寺勤行、同日池上詣り 中山六十六世日理、祖師堂葺替を本願す、江戸二十六講中、本阿弥家奉加す

1747年	延享四年	江戸谷中妙法寺にて中山祖師開帳す
1750年	寛延三年	その翌足のたゝぬ池上「誹諧武玉川」
1753年	宝暦三年	江戸深川浄心寺にて身延古仏堂祖師開帳、身延出開帳の濫觴なり
1755年	宝暦五年	江戸下谷法養寺にて池上本門寺旅立祖師開帳す
1765年	明和二年	日蓮は柿と葡萄にあきたまひ。お会式の餅を髪から一つ出し。ぼったりと散るは会式の桜なり「誹風柳多留」。
1769年	明和六年	江戸玉泉寺にて下総曾谷安国寺延寿祖師開張す
1770年	明和七年	江戸深川浄心寺にて身延奥之院祖師並に鬼子母神開帳す
1776年	安永五年	京都本圀寺五百遠忌を修せん為、講を結び満五ヶ年間積立する事とし京都の檀越に勧誘す
1781年	安永十・天明元年	五百遠忌勤修
1784年	天明四年	春、武蔵柴又題経寺板刻の帝釈天の像を発見し、江戸に出開帳し一粒符を出す、除厄の祈祷の始めなり
1785年	天明五年	九月二十七日から十月十三日まで、身延に於て五百遠忌大法要を営む
1790年	寛政二年	玄修院日明、五百遠忌に際し祖書校正の大願を起す
1803年	享和三年	江戸牛込込福寺にて中山法華経寺本堂の祖師像開帳す
		妙法ののりの手際にさくら花 是れや小春のよしの紙にて「狂言鶯蛙集」
		京都本圀寺日脱、江戸浅草幸龍寺に釈尊像の開帳を始め六十日間大群集す
		浅草玉泉寺にて星下妙純寺祖師出開帳をなす
		「増補江戸年中行事」に、十月十三日日蓮宗御影講、法会式執行、雑司ヶ谷法明寺地中の寺々かざり物有。八日より十八日迄。池上・堀の内・下総中山へ参詣おびたし

1815年	文化十二年	下谷徳大寺摩利支天開帳す
1814年	文化十一年	京都本圀寺は本堂再建勸化の為、釈尊・靈宝等、江戸押上法恩寺にて開帳す
1813年	文化十年	浅草矢先町本覚寺祖師開帳す
1812年	文化九年	浅草池の妙音寺にて二ノ江妙勝寺祖師開帳す
1811年	文化八年	浅草池の妙音寺にて佐渡一ノ谷妙照寺祖師開帳す
		江戸浅草池の妙音寺にて駿河岩本実相寺祖師開帳す
		浅草池の妙音寺にて新曾妙顕寺祖師・釈迦如来開帳、曼荼羅を拝せしむ
		江戸白金覚林寺にて清正公二百年忌供養開帳す
1810年	文化七年	浅草玉泉寺にて鎌倉松葉谷長勝寺祖師開帳す
		浅草大仙寺にて塚原根本寺祖師開帳す
		本所本仏寺にて甲州石和遠妙寺祖師像開帳す
1809年	文化六年	江戸日暮里妙隆寺祖師開帳す
		江戸芝金杉円珠寺七面大明神開帳す
		江戸浅草大仙寺にて鎌倉妙隆寺祖師開帳す
1808年	文化五年	江戸本所本仏寺鬼子母神開帳す
		深川浄心寺にて身延七面大明神開帳す
1807年	文化四年	浅草八軒町大仙寺にて、下総中山奥之院祖師開帳並に京都頂妙寺二大天王を開帳す
1805年	文化二年	谷中一乗寺祖師開帳す

1815年	文化十二年	江戸浅草長遠寺にて下総曾谷法蓮寺祖師開帳す
1816年	文化十三年	浅草長遠寺にて、鎌倉本覚寺祖師開帳す
		浅草池妙音寺祖師開帳す
		浅草菊店法養寺にて、池上旅立の祖師開帳す
1817年	文化十四年	江戸本所法恩寺祖師開帳す
		浅草玉泉寺にて、相模某寺天拝祖師開帳す
1819年	文政二年	浅草大仙寺にて駿河海長寺願満祖師開帳す
		浅草幸龍寺にて藻原妙光寺祖師開帳す
1820年	文政三年	江戸深川浄心寺にて身延古仏堂祖師出開帳す
		浅草玉泉寺にて松葉ヶ谷妙法寺祖師開帳す
1821年	文政四年	江戸浅草にて鎌倉松葉ヶ谷祖師開帳す
1822年	文政五年	江戸深川浄心寺にて、片瀬龍口寺祖師開帳す
1824年	文政七年	江戸浅草慶印寺にて京都妙満寺祖師並に紀伊道成寺鐘・清正朝鮮より持参の大曼荼羅等開帳す
1830年	文政十三・天保元年	深川浄心寺に於て、身延山諸堂再建勸財のため出開帳を行う
1831年	天保二年	京都本能寺新築本堂にて、宗祖五百五十遠忌を執行す
		京都立本寺役者は宗祖五百五十遠忌につき、登山の砌座論を禁ずる旨を末寺真常寺・本像寺・妙感寺に達す
		春より浅草本蔵寺にて、休息立正寺祖師開帳す
		玉沢日桓、富士山宮司小野大和守の発願により唐銅十界本尊宝塔を富士山頂に建立す

南無日蓮大菩薩

五百五十遠忌御報恩謝德

甲州西郡長沢邑善住寺所化是間造立焉



再  
 三之切  
 板

日蓮聖人御法海

勝 声 妙  
 断 又 妙  
 又 床 女

大 阪 船 町  
 加 嶋 屋 清 助 板

勅 化 傳 記

預日即法友一美く去  
 対於入投入て流生力  
 即て預日て世世入  
 多くは精なる者か  
 去て幼州が死教浪

天の字は  
 天の字は  
 天の字は  
 天の字は

1831年	天保二年	堀之内妙法寺祖師開帳す
1832年	天保三年	九月二十七日から十月十三日まで身延日環、宗祖五百五十遠忌を修し万部供養をなす
1833年	天保四年	浅草幸龍寺にて下総駒木成願寺諏訪明神開帳す
1834年	天保五年	浅草新寺町本蔵寺にて玉沢妙法華寺祖師開帳す
1835年	天保六年	浅草山谷正法寺にて佐渡塚原祖師開帳す
1836年	天保七年	京都本圀寺日要、生御影高祖を江戸浅草幸龍寺へ開帳す
1837年	天保八年	深川浄心寺にて小田原浄永寺祖師・七面大明神開帳す
1838年	天保九年	浅草本蔵寺にて下総多古妙光寺祖師開帳す
1839年	天保十年	浅草本蔵寺にて沼津妙海寺祖師開帳す
1840年	天保十一年	目黒正覚寺鬼子母神開帳す
		浅草本蔵寺にて柴又帝釈天板本尊開帳す
		江戸丸山興善寺にて松葉ヶ谷妙法寺祖師開帳す
		谷中妙福寺にて日親上人開帳す
		浅草寺町蓮光寺にて遠州貫名山妙日寺祖師開帳す
		深川浄心寺に於て身延山天拝祖師・七面宮並に靈仏靈玉の開帳を行う
		江戸浅草新寺町玉泉寺にて下総妙興寺祖師開帳
		江戸千駄谷仙寿院鬼子母神開帳す
		江戸浅草寺町正覚寺にて下総大野法蓮寺祖師開帳す

1840年	天保十一年	浅草玉泉寺にて佐渡塚原根本寺祖師開帳す 江戸谷中妙福寺祖師並に日親上人開帳す 幕府、僧侶神職の市街居住を禁じ、かつ念仏講・題目講と称し集会するを禁ず
1842年	天保十三年	
1843年	天保十四年	江戸雑司ヶ谷法明寺塔頭、毎年十月お会式の飾物を止めらる
1844年	天保十五・弘化元年	江戸巢鴨靈感院、お会式飾物として宗祖御難の様子を菊花にて作りしより再び流行す
1845年	弘化二年	出村本仏寺鬼子母神開帳す 柴又帝釈天開帳す
1846年	弘化三年	江戸浅草寺町正覚寺にて、中山鬼子母神開帳す
1847年	弘化四年	江戸浅草八軒寺町大円寺にて川越在郷戸妙昌寺祖師開帳す 浅草寺町大仙寺にて武蔵馬場村諏訪明神開帳す
1849年	嘉永二年	身延奥之院祖師・七面大明神・靈仏靈宝等を江戸深川浄心寺に開帳、日薪、広く施主を募り釈尊千体仏像一体宛造立す
1851年	嘉永四年	「東都遊覧年中行事」に、十月十三日、法華宗祖師正念日、おめいかうの終り
1857年	安政四年	身延古仏堂祖師・天拝七面宮・靈仏宝を深川浄心寺に開帳す
1862年	文久二年	「名所江戸百景 金杉橋芝浦」歌川広重
1863年	文久三年	「江戸名勝図会 池上」二代広重 深川浄心寺に於て身延奥之院祖師・七面宮開扉、靈宝拝観す
1864年	文久四・元治元年	「身延山朝詣群集新大橋の景」二代広重 「江戸自慢三十六興 池上本門寺会式」二代広重

1884年	明治十七年	「武蔵百景之内 池上本門寺」小林清親
1883年	明治十六年	東京小伝馬町祖師堂、願満祖師の開扉を行う
1881年	明治十四年	日蓮宗宗徒の撃鼓行脚解禁される
1880年	明治十三年	身延山久遠寺、日蓮聖人六百遠忌法会を修す。祖師堂上棟遷座式をあげる
1877年	明治十年	池上本門寺御会式にコレラ対策のため医師が派遣される
1876年	明治九年	身延山久遠寺、日蓮聖人六百遠忌式次第を末寺一般に布達し、参詣路及び身延・甲府間道路を改修する
1875年	明治八年	西南戦争
1874年	明治七年	新居日薩、妙法講社が神仏祭礼開教の際に礼教を軽んじているとし、妙法講社取締に関する番外諭達を発する
1873年	明治六年	日薩、宗祖御入滅の日を陽暦に換算して、十一月二十一日と定む
1867年	慶応三年	管長新居日薩、東京府内の講中代表を東京浅草本法寺に召集し妙法講社の件につき指示する
		教部省、日蓮宗に対し神仏祭礼開帳の節は礼教すべき旨達書を発する
		新居日薩、東京府内講中代表を招き講社本来の精神を説く
		官、日蓮宗徒の打鼓喧噪群行を禁ず
		官、日蓮宗徒の打鼓群行を禁ず
		日蓮宗宗徒、神仏合併大教院開院式に当り撃鼓唱題して大教院に赴き神官と争う
		中山法華経寺祖師堂総修復の為、鬼子母神を牛込原町円福寺に於て開帳・勧募す



山崎

目蓮大菩薩

縁起

言知るお景

かん兼おたの

かん兼おたの

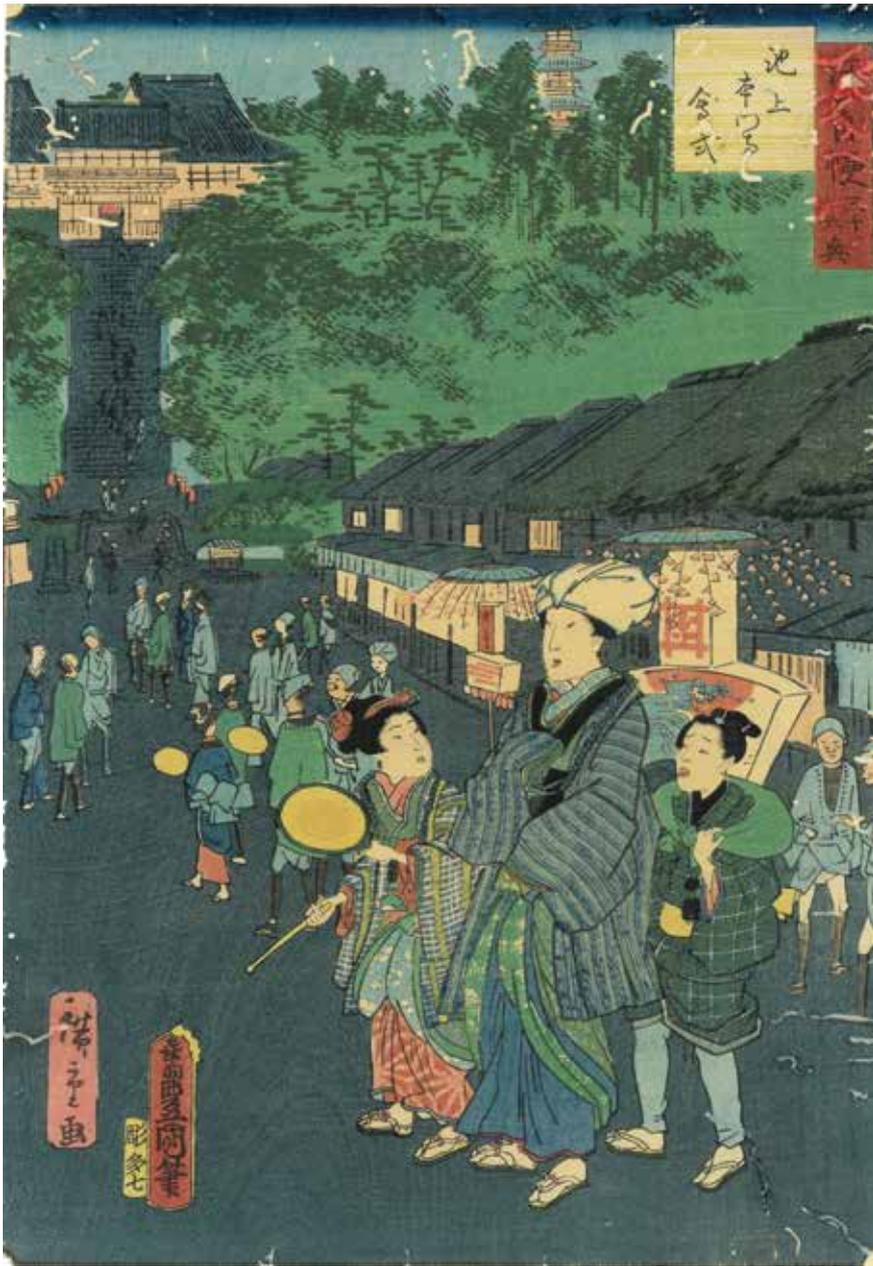
越嘉

寝たのたの



10  
身延山朝参之図

11 江戸自慢三十六興 池上本門寺会式



昭和五年九月

高祖日蓮大菩薩歌題目

島田町

増井三子

こうそくにちれん

たいほさつ

あひやをんき

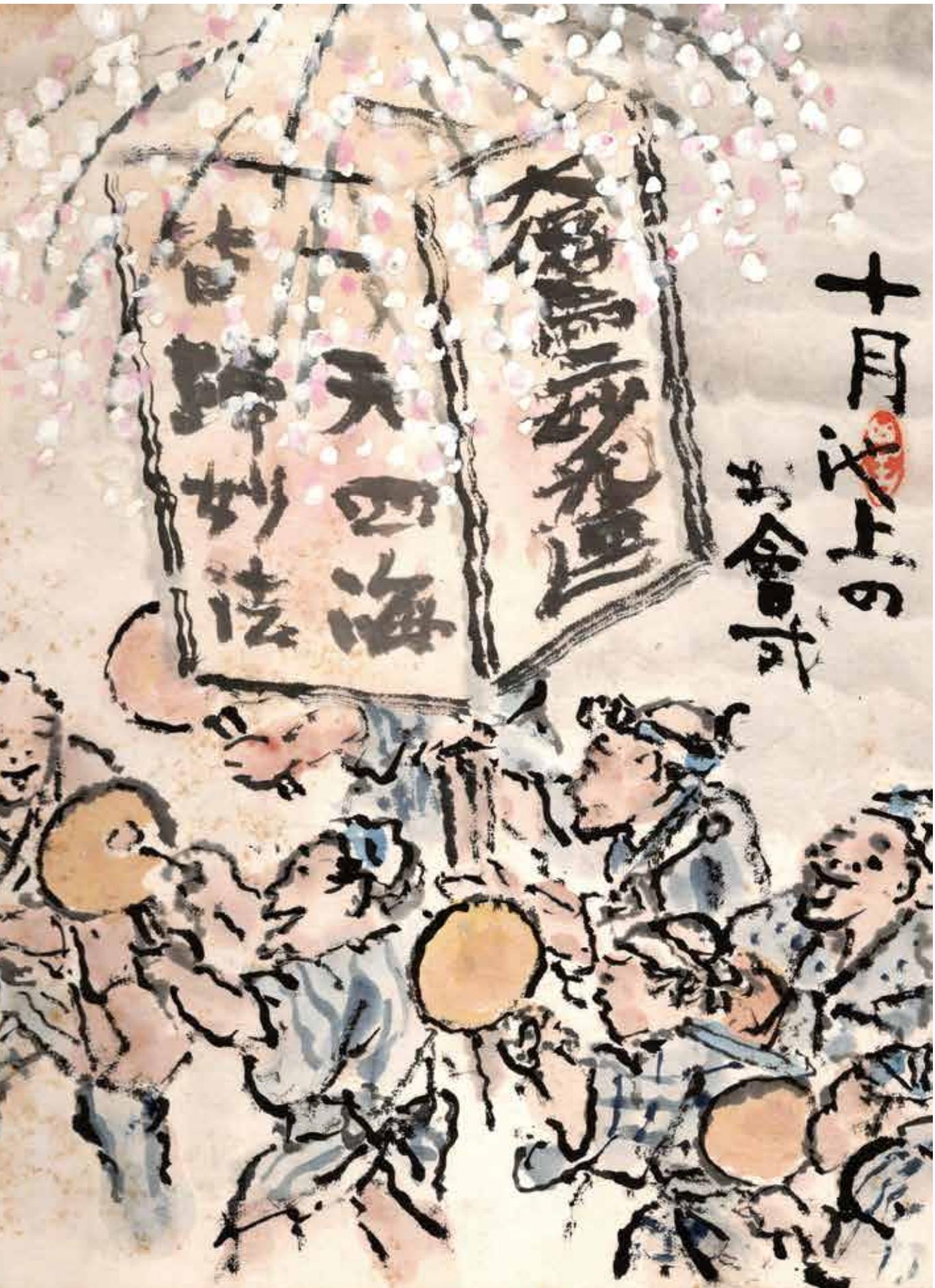
ごほうかんにて

あまの妙法蓮華經



1899年	明治三十二年	東京十講，初集会を金清楼にて開く
1894年	明治二十七年	日清戦争 身延山久遠寺，出開帳を東京深川と横浜・藤沢・小田原市などで行う 身延山久遠寺，祖師像出開帳を東京深川浄心寺にて行う
1893年	明治二十六年	神奈川県妙純寺，出開帳を県下各地で行う
1892年	明治二十五年	池上本門寺，祖師像の出開帳を東京浅草長遠寺にて行う
1891年	明治二十四年	山梨県小室山妙法寺，出開帳を東京深川浄心寺にて行う。小林日昇，開扉中に説教を行う
1889年	明治二十二年	「日宗新報」宗務院届出済の全国講社名二百十五講を発表する 池上本門寺，東京芝口講中の尽力により多宝塔の修復を始める
1887年	明治二十年	京都妙顕寺小林日董、祖師像開扉を浅草本蔵寺に執行す 池上本門寺，日蓮聖人像の開扉を行う。百余講社参詣する
1886年	明治十九年	神奈川県片瀬龍口寺，出開帳を東京土富店長遠寺にて行う 中山法華経寺，鬼子母神の開扉を東京小伝馬町村雲別院にて行う 横浜市の妙法講，諸講を併合し総結社規約を定める
1885年	明治十八年	身延山久遠寺，日蓮聖人尊像・七面大明神像の出開帳を東京深川浄心寺にて行う 十月十三日、大森駅において池上本門寺御会式臨時列車転覆、日本の鉄道における初の旅客死亡事故となる

1899年	明治三十二年	池上大坊本行寺, 自鏡満願日蓮大菩薩像の出開帳を東京神楽坂善国寺にて行う 元寇記念日蓮聖人銅像拝観大会, 東京深川浄心寺にて開かれる 身延山久遠寺, 出開帳を東京深川浄心寺にて行う 神奈川県片瀬籠口寺, 出開帳を東京浅草草長遠寺にて行う 横浜十講, 僧侶反対を表明し信教自由・勸化謝絶を決議する 横浜日宗会・横浜十講, 開宗六百五十年記念大会を南太田常照寺にて開く 日蓮宗東京・横浜諸講中, 開宗六百五十年記念講中旗大行列を小伝馬町祖師堂より上野公園まで行う 東陽堂より風俗画報増刊・日蓮聖人開宗六百五十年記念号発行される 池上本門寺御会式に合わせて大森駅においてペスト検疫が行われる 日宗施本伝道会, 「御会式」を発刊する 日露戦争 管長久保田日亀, 日露開戦中内拝開帳を遠慮すべき旨諭達を発する 日露戦争終結
1900年	明治三十三年	
1901年	明治三十四年	
1902年	明治三十五年	
1903年	明治三十六年	
1904年	明治三十七年	
1905年	明治三十八年	日蓮宗大学林生総員, 祝捷提灯行列を行い, 品川旧砲台にて君ケ代及び万歳を唱和する 横浜市寺院・横浜十講, 戦捷奉告及び戦病死者追弔会・大演説会を長者町常清寺にて開く 小湊誕生寺, 出開帳を東京谷中瑞輪寺にて行う 堀ノ内妙法寺, 日露征戦お願いほどの開帳を行う 小湊誕生寺, 出開帳を東京谷中瑞輪寺にて行う
1906年	明治三十九年	小湊誕生寺, 出開帳を東京谷中瑞輪寺にて行う



向ふは方巻

團扇大鼓

一母三百の何んぞとあつと目蓮様の猶進  
まきまきとかが江の川に入るもあつと  
宵越の使にめ気象の紙の紙  
抱一と事をも救て目

とれはくはとばかん

花の芳里紙



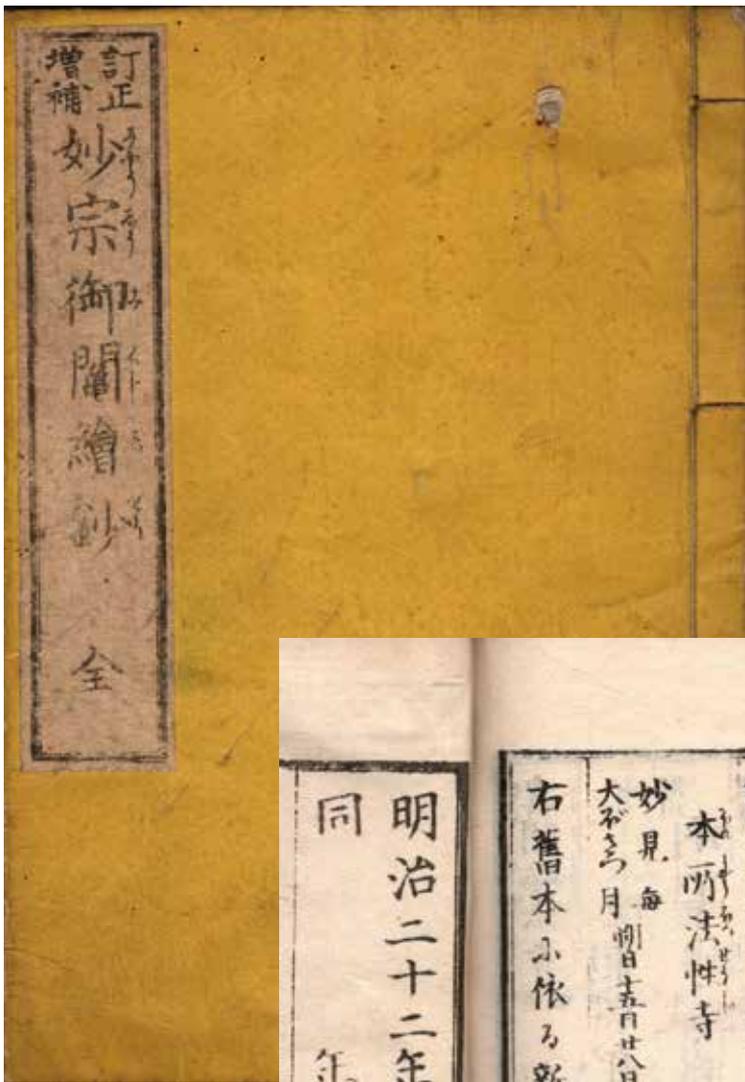


15  
両面柄付太鼓









⑤ 大集會  
 興延山久遠寺  
 大會 四月八日  
 同 六月十五日ヨリ 至同十七日  
 千部 至同十四日ヨリ  
 御虫拂 七月七日  
 七面山 九月十八日  
 御祭日 九月十九日  
 御會式 十月十三日  
 本所法性寺  
 妙見 毎 朔日十五日廿八日  
 大不三月 朔日十五日廿八日  
 右舊本小依る新曆旧曆ありと雖も大概此の如し

池上本門寺  
 千部 三月十九日ヨリ 至同二十八日  
 大會 至同十三日ヨリ  
 堀内妙法寺  
 千部 至同十八日ヨリ 至同廿七日  
 御會式 至同十三日ヨリ  
 淺草本法寺  
 けんそく祭 至月廿九日  
 淺草幸龍寺  
 清正公 毎 廿三日 廿四日  
 せつろん會福まつり出る  
 御開帳 庚申の日

正山法華經寺  
 大會 至同 八日ヨリ 至同 二十日  
 御會式 至同 二十日ヨリ  
 鬼子母神 至同 廿七日ヨリ 至同 廿七日  
 誕生佛 至同 廿七日ヨリ 至同 廿七日  
 友台中安立寺 至同 廿七日ヨリ 至同 廿七日  
 片瀬龍口寺  
 千部 至同 初日ヨリ 至同 十日ヨリ  
 大會 至同 十日ヨリ 至同 十二日  
 柴又村帝釋寺

明治二十二年 四月十五日 印刷  
 同 年 同月 廿五日 出版  
 伊那町 日影區長 池上寶六

# 謹賀新禧

重中  
要行  
年事

釋尊御降誕會  
宗祖御會式  
宗祖小會式

五月八日(卜月迄リ)  
十月十三日  
舊十月十三日相當日

御年一頭會  
宗祖御入山會

六月十三日  
六月十七日

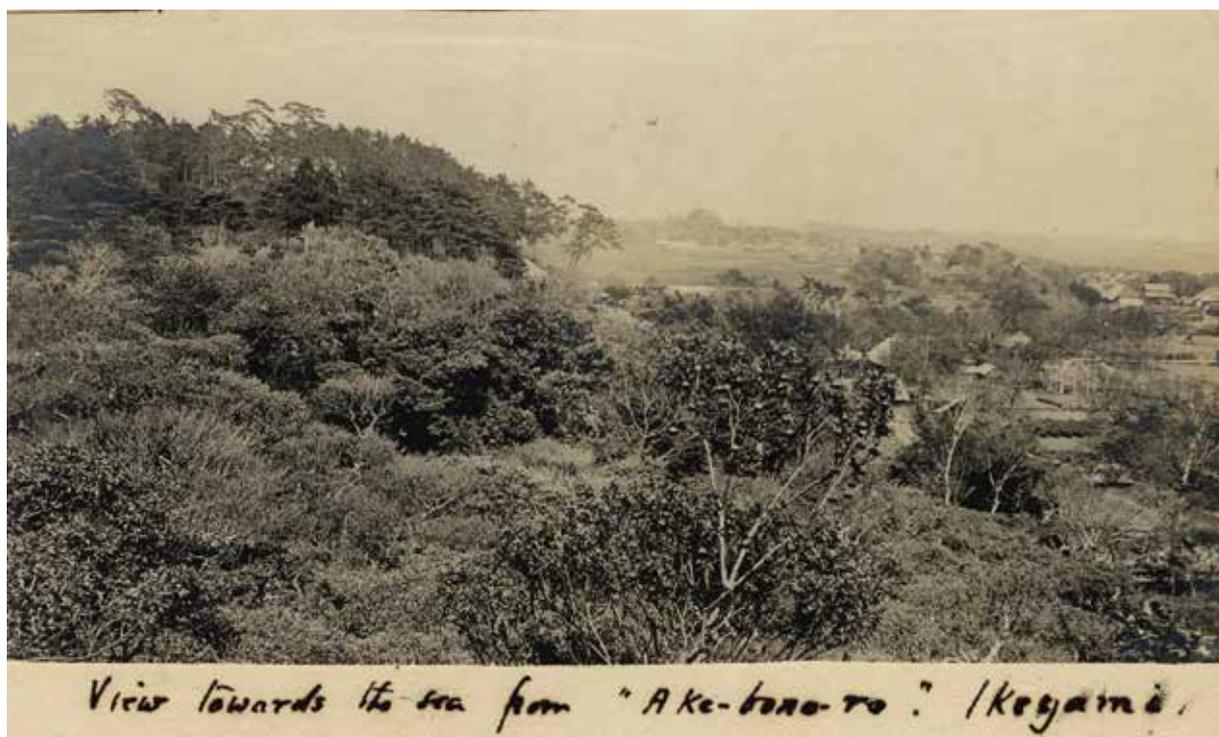


明治四十五年元旦

甲州身延山久遠寺

身延山三門之風光

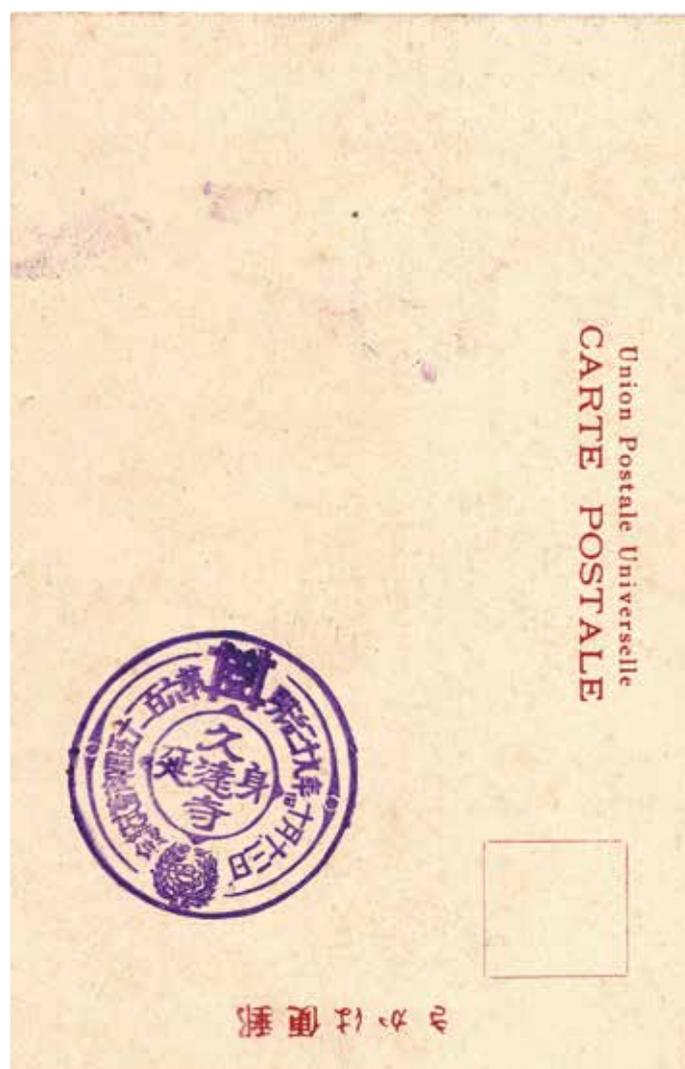




21 池上本門寺御会式記念印絵葉書



22 身延山久遠寺御会式記念印絵葉書



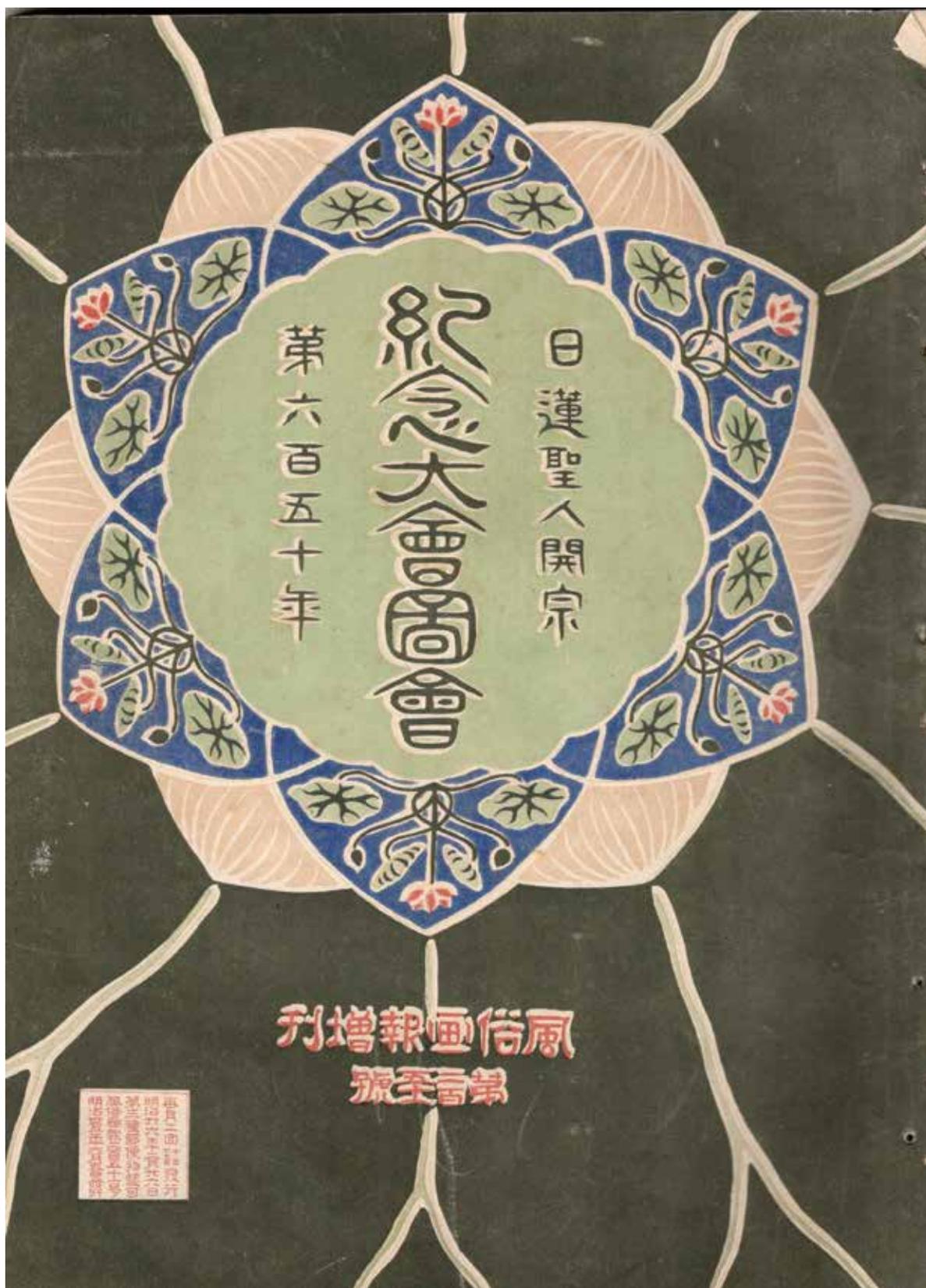


23  
池上本門寺總門繪葉書



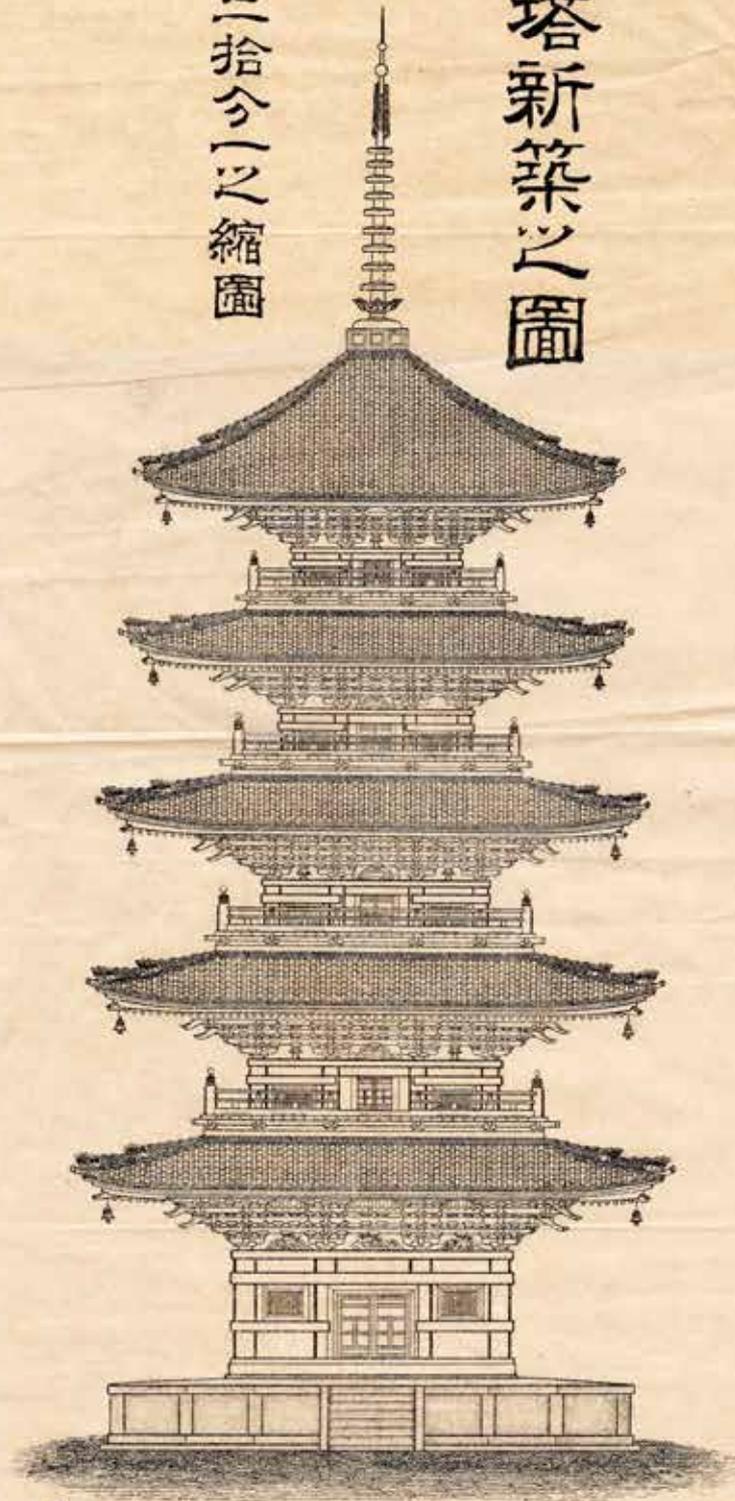
24  
池上本門寺繪葉書





五重塔新築之圖

百二拾分一之縮圖



相州片瀨龍口寺

繪圖市尾上町  
金洪舎石印

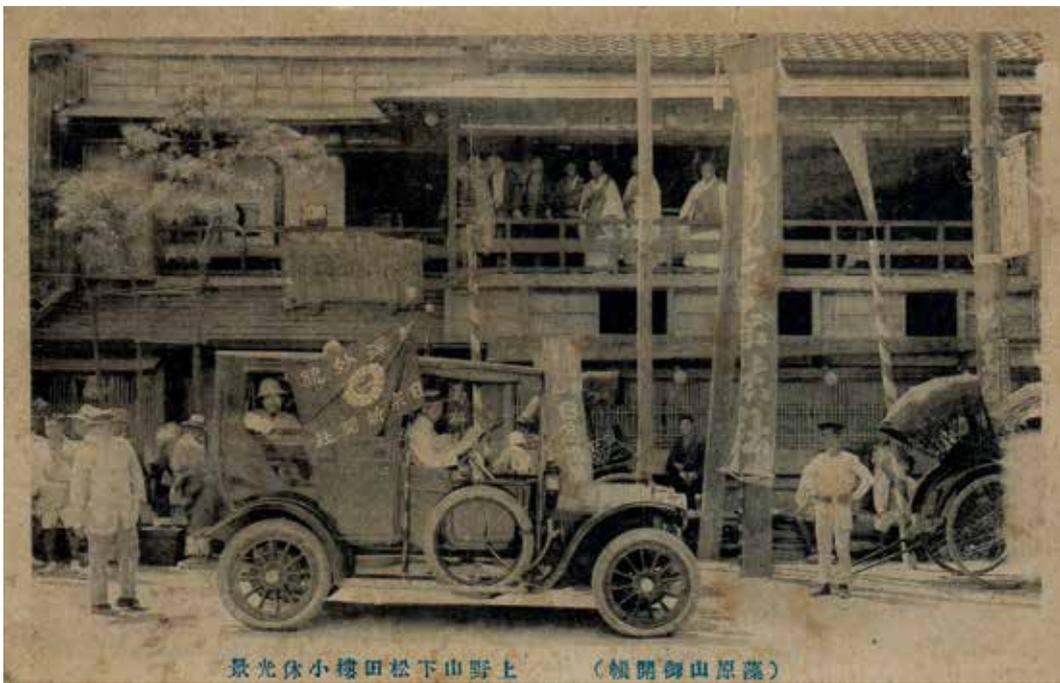
1908年	明治四十一年	神奈川県依智妙伝寺、出開帳を東京谷中福相寺にて行う
1909年	明治四十二年	大坊本行寺の御会式桜玉垣内に軍服姿の男が侵入し全ての枝を折る 池上本門寺、出開帳を東京浅草長遠寺にて行う
1910年	明治四十三年	池上本門寺、出開帳を横浜浄灌寺・妙香寺にて開く 池上本門寺山内清正堂、清正公三百年祭を修す 東京信徒、清正公銅像を池上本門寺に建立する旨を企画する
1911年	明治四十四年	福井妙高寺、宗祖六百五十年遠忌取越法会を修す 池上大坊本行寺、自鏡願満日蓮大菩薩出開帳を東京神楽坂善国寺にて行う
1913年	大正二年	佐渡阿仏房妙宣寺、出開帳を東京浅草正覚寺にて行う
1914年	大正三年	片瀬龍口寺五重塔完成す 佐渡阿仏房妙宣寺、出開帳を東京浅草正覚寺にて行う 身延山久遠寺祖師像、東京深川浄心寺に於て開扉を行う 第一次世界大戦
1915年	大正四年	東京八講・東京十講・神田八講等、同善会を設けて大正博覧会開期中、日蓮宗観光団体の便利を計る
1916年	大正五年	静岡県岩本実相寺、出開帳を横浜妙香寺にて行う 茂原藻原寺、出開帳を東京浅草幸龍寺にて行う 仏教救世軍、創立一周年を記念して機関紙三千部を増刷し、施本として池上本門寺お会式等で配布する 日蓮聖人御両親六百五十遠忌（聖父六百六十年・聖母六百五十年忌）法要を千葉県天津小湊妙蓮寺にて修す



29  
藻原山出開帳絵葉書



30  
藻原山出開帳絵葉書



31 小湊山出開帳絵葉書



32 小湊山出開帳絵葉書





(ノ於=寺浦草淺京東) 概開山湊小年百七翼降御祖聖  
 通道街成御谷下講各ノヒ遊子居御ソコ寺珠圓芝日五十二月七年九正大

33  
 小湊山出開帳写真

34  
小湊山出開帳写真



35  
小湊山出開帳写真







1917年	大正六年	村山全生園（府下）にて入院信者の恒例御会式を修す、望月日謙・逸見主事、法要講演を行う
1918年	大正七年	第一次世界大戦終結
1919年	大正八年	東海道線蒲田大森間線路に池上本門寺御会式参詣客が雪崩れ込み電車と衝突す
1920年	大正九年	七月、東京三田篤信家紙商・藤波兄弟、三田通りに日蓮聖人御一代の事蹟を写した大燈籠を立て連夜点灯する 龍口法難六百五十年報恩法会を神奈川県片瀬龍口寺にて修す
1921年	大正十年	田中智学、『天業民報』創刊披露大宣伝を池上本門寺お会式にて行う
1922年	大正十一年	日蓮宗青年協会・東洋大学橘香会・日蓮宗大学連合により、報恩伝道を池上本門寺お会式にて行う。 宗務院、聖誕七百年記念国禱会を小湊誕生寺にて修す 宗祖日蓮聖人に立正大師の諡号を宣下せらる
1923年	大正十二年	十月六日、池上電気鉄道により蒲田・池上駅間開業す コレラ流行のため池上本門寺御会式の露店でアイスクリームなどの販売が禁止される 関東大震災
1924年	大正十三年	十月十一日の各新聞において池上本門寺御会式例年通りとの記事が出るも被災状況と境内に被災者が避難していたため 実質中止となる
1926年	大正十五年・昭和元年	芝白金講中の万灯が品川黒門横丁に差し掛かった時、短刀を振り回す男が乱入し万灯持ちを刺殺す 立正高等女学校、日蓮聖人六百五十遠忌記念事業として設立認可を受ける
1927年	昭和二年	日蓮聖人鑽仰都下学生連盟・日蓮宗青年協会・師子王会・村雲婦人会、池上本門寺会式に大挙して説教伝道を行う 身延山久遠寺、宗祖廟所草庵地域の整備を完了する。宗祖六百五十遠忌報恩記念事業の準備に着手する

1928年	昭和三年	<p>千葉県原山妙行寺講社連合、身延山団体参拜を行う</p> <p>池上本門寺日蓮聖人尊像、国宝に内定する</p> <p>宗務院、東京府下村山全生病院のお会式と講演会を行う</p> <p>神保弁静・柴田一能、宗祖六百五十遠忌を記念して日蓮聖人御伝木版画を創刊す</p> <p>身延山久遠寺法主杉田日布、身延山の六百五十遠忌準備役員を委嘱する</p> <p>京都十六本山、会式行列を京都御所東梨木神社前広場より行う</p> <p>東村山全生病院に小野鍊雄駐在布教師、御会式法要の講演を行う</p> <p>四月八日、堀ノ内妙法寺、六百五十遠忌を修す。村雲日浄御経頂戴の儀を行う</p> <p>宗務院、六百五十遠忌準備のための全国派遣布教を開始する</p> <p>立正高等女学校、六百五十遠忌奉讃記念の講演・演劇・童謡舞踊会を開く</p> <p>東京谷中瑞輪寺住職橋本鍊中、六百五十遠忌記念に慈愛幼稚園を設立する</p> <p>池上本門寺御会式当日、大森大井蒲田署管内のカフェ・バーは終夜、品川署管内は午前四時まで営業を許可される</p> <p>十月十三日午前二時頃、池上浄国橋あたりで深川と四谷の講数百人が万灯の先を争い大乱闘をおこす</p> <p>管長酒井日愼、遠忌に対し伝弘以て祖恩報謝を論達す</p> <p>管長酒井日愼、六百五十遠忌報恩の仏事円成の教旨を発する</p> <p>日蓮宗御遠忌事務局、遠忌法要の儀式内容を発表する</p> <p>四月七日より十三日まで身延山久遠寺に於て第一期宗祖六百五十遠忌大法会を虔修す</p> <p>四月九日より十五日まで池上本門寺に於て第一期宗祖六百五十遠忌大法会を虔修す</p>
1930年	昭和五年	
1929年	昭和四年	
1931年	昭和六年	

四月十一日、京都妙満寺・要法寺・本能寺、六百五十遠忌法要を修す

四月十二日、国柱会、六百五十遠忌法要並びに東京一之江大講堂落成式を修す

四月十四日より十九日まで中山法華経寺に於て第一期宗祖六百五十遠忌大法会を虔修す

四月二十七日及び二十八日、日比谷公会堂に於て宗務院主催の御遠忌並に立正大師諡号宣下十周年記念大会を開催す

五月一日より十五日まで身延山久遠寺に於て第二期宗祖六百五十遠忌大法会を虔修す

立正児童教会連盟主催のもとに東京時事新報社講堂にて遠忌記念児童大会を開く

勅額降賜の内達を管長酒井日愼に文部大臣より受く

管長酒井日愼、全宗門寺院に於て宗祖六百五十遠忌報恩会を修すべきことを諭達す

十月一日酒井管長、池上本門寺に於て勅額拝戴式を奉行す

十月二日酒井管長、身延山久遠寺に於て勅願奉掲式を虔修す

十月六日より十五日まで身延山久遠寺に於て第三期宗祖六百五十遠忌大法会を虔修す

十月十一日より十三日まで池上本門寺に於て第二期宗祖六百五十遠忌大法会を虔修す

立正大学、六百五十遠忌報恩会を修す

十月十三日朝八時、池上本門寺より御遠忌法要及び臨滅度時の鐘等を全国に中継放送す

十月十七日及び十八日、大阪日蓮宗橘園主催御遠忌記念大会を行う

教誌「日蓮主義」、六百五十遠忌法会・勅額拝戴式写真特輯号を発行する

十一月十四日より十九日まで中山法華経寺に於て第二期宗祖六百五十遠忌大法会を虔修す

感領證

一金五円也

右日蓮大聖人六百五拾遠忌  
大法要虔修ノ爲御喜捨  
相成正感領候也

昭和六年三月十三日

顯本法華宗

總本山妙満寺

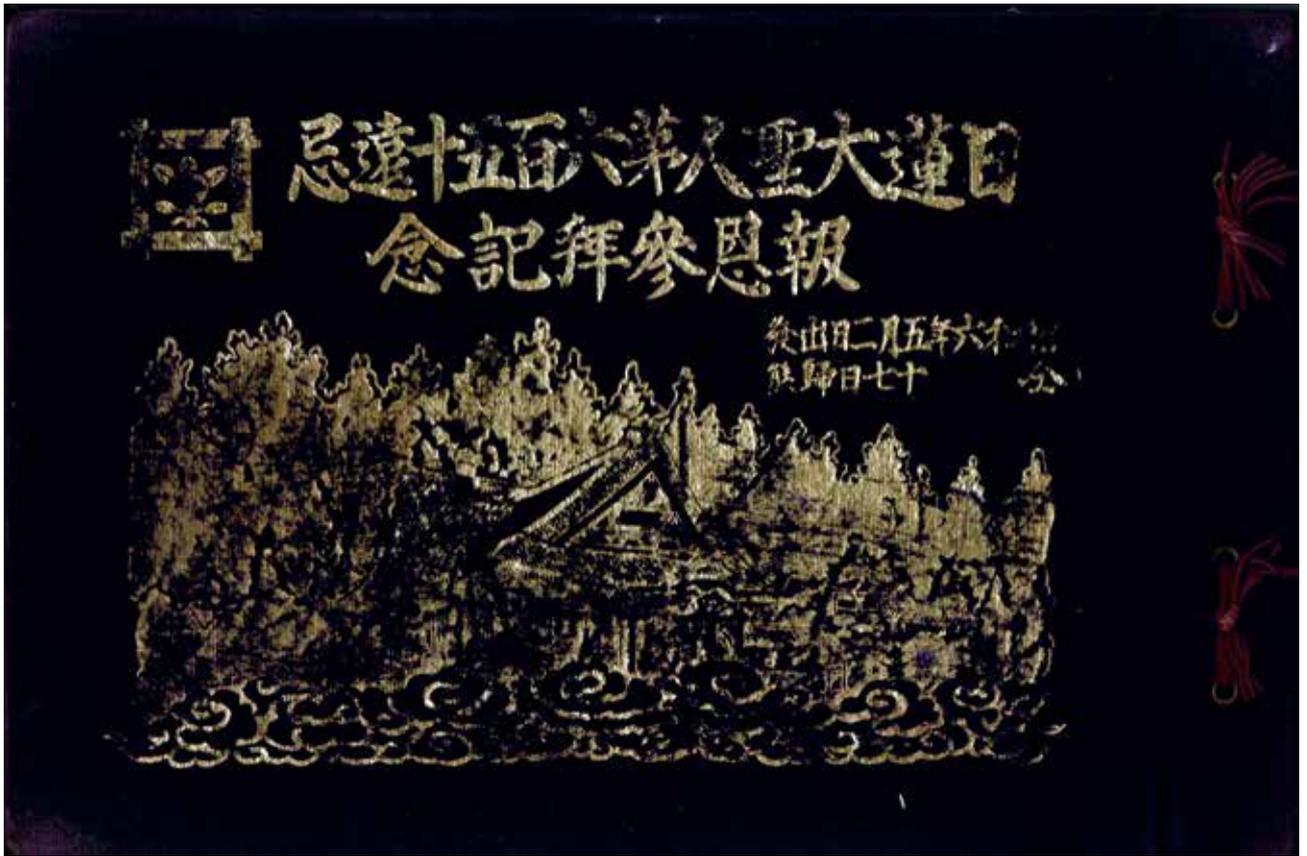


喜本和寺殿









41 六百五十遠忌報恩參拜記念写真帳





本門寺會式廣告



本門寺會式  
當日門前ノ實況



的(的)



現代假裝裝萬燈



日蓮聖人之墓所

武州下丸子子村  
昭和三十四年新年造萬燈



現代ノ萬燈



本門寺會式當夜ノ萬燈的



現代の子供萬燈

傳實眞菩薩大蓮日



(山上、泉氏所藏)明治十九年興行番附  
風師六百遠忌紀念大阪中村庵中村福助主談



萬燈=關スル  
子供ノおちや



— ( 66 ) —

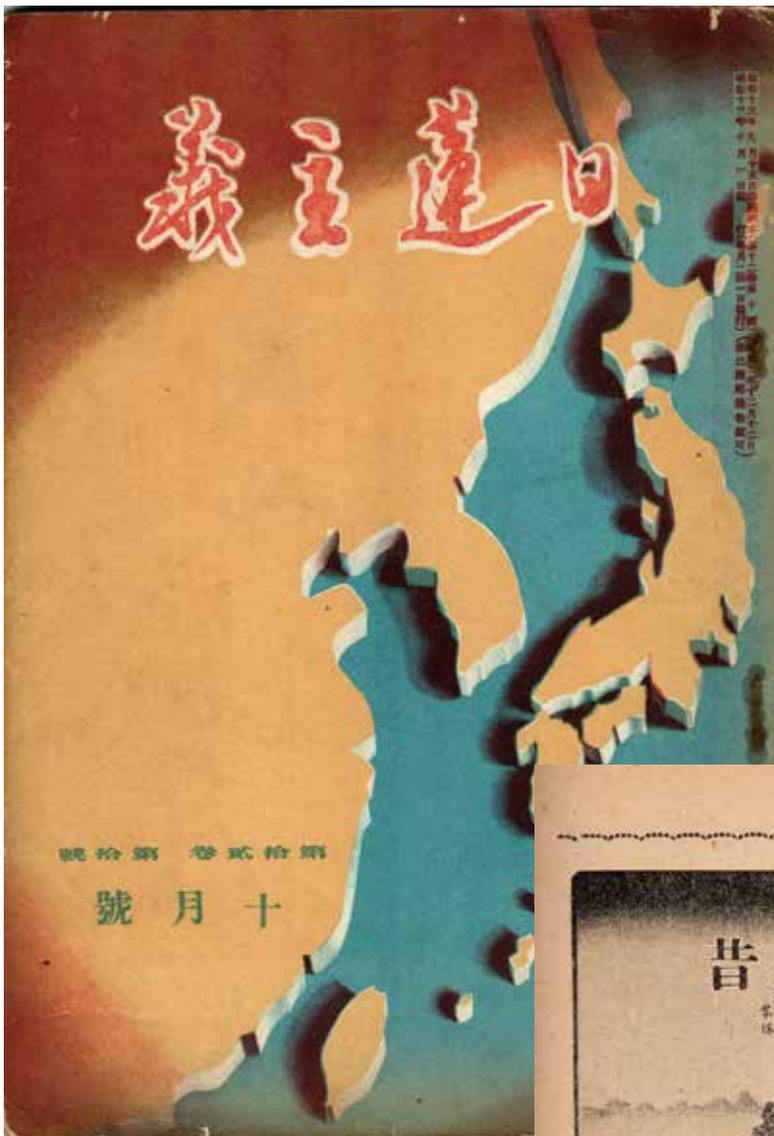


御會式の沿革と池上本門寺

山上、泉

一 今年の御會式は、俗も日蓮大聖人の御聖業から六百四十九年に相するので、明年の御遠忌を迎へ奉る御門下の報恩心を一入深めしめる意義の深き盛次である。且、戦前、日本電信通社社の主催の下に、「お國自慢」を募集するに際し、報知新聞社は先づ東京名物の随一であり、最く殷賑を呈する東京年中行事の一として十月の「御會式」を推薦して居る程である。茲に一夜を遂に圓扇太鼓や法の奉一の池上を中心として、文藝や繪畫に現れた御會式の沿革に就て少しく紹介しようと思ふ。

二 「會式」とは、汎く一般の法會の儀式をさすのであるが、さういふ成語を國文學に求めると、恐らく足利時代以前にはなかつたらしい。歌曲「九世戸」に、  
「丹後の國九世の戸は……文殊を勧請の地なり殊に林羅半ば、彼の會式にて御座候ふ……」などと見えるのが古い方であらう。其「會式」は、眞言宗の「御影供」浄土真宗の「報恩講」と同様、概ね開祖示寂の忌日に當り大法會をさすのであるが、何時しかそれが日蓮宗專用語となつ



昔今の式會御 60

昔今の式會御

【廣氏泉い】（保重廣 繪院の上池 雷板）

かよそ江戸時代に於ける日蓮宗に就いては、夫のやうな四大特色を數へられたほど豪勢をさはめたものです。その第一は「法華氣質」といふ成語です。その熱烈さから「法華勤めるほど勤めても」といひ、「堅まり法華」といふ諺も生じ、茶道では「情張」（淨玻璃）と稱へた茶釜の一種を「法華釜」といふ異名を以て呼んだ。又、川柳の「堅法華情しい娘を寝かし物」といひ、「堅法華橋町へ轉宅し」と詠まれたのも、更にまた私可多咄や落語の「法華猫」、「法華長屋」、「お材木」、「腹中」などでも皆法華魂を描寫した痛快な題材であります。

第二には「お宗旨」と申す語です。たゞ一口に「宗旨」といへば、何の宗派にも通ずる汎稱であるが、それを一度改まつて「お宗旨」と呼ぶと、我が日蓮宗専用の特殊語となつてしまふのである。即ち「お」の一字の有無で、さう違つたのである。「お宗旨がみんな指さすいゝ娘」と申す「保風柳

昭和六年 四月九日ヨリ 十五日迄  
十月十一日ヨリ 十三日迄

# 日蓮大聖人六百五十遠忌大法會

## 御遠忌法要案内

第壹期 自四月九日 至同十五日

- 四月九日 前會 讀誦會  
後會 天童音樂法要
  - 同 十日 前會 讀誦會  
後會 天童音樂法要
  - 同 十一日 前會 法華禮誦會(通出品)  
後會 天童音樂法要
  - 同 十二日 前會 法華禮誦會(壽量品)  
後會 天童音樂法要
  - 同 十三日 前會 法華禮誦會(神力品)  
後會 天童音樂法要
  - 同 十四日 前會 大因講會  
後會 讀誦會
  - 同 十五日 前會 施餓鬼放生會  
後會 天童音樂法要
- 右終テ御廟參音樂雜供養

第貳期 自十月十一日 至同十三日

- 十月十一日 前會 讀誦會  
後會 天童音樂法要
- 同 十二日 前會 立正安國論禮誦會  
後會 天童音樂法要
- 同 十三日 前會 讀誦會  
後會 御廟參大行列音樂雜供養

大法會中連日  
畫、說、教、講、演  
夜、映畫布教京濱間諸講社  
萬燈行列

以上

## 參拜案内

### 一、順路、交通

#### 東海道方面

東京驛ヨリ 蒲田下車池上電車へ  
省線電車 三丁 乗リ替へ池上驛下車  
大森驛下車乗合自動車ニ乗リ替へ本門寺  
前下車一丁 乗リ替へ本門寺  
田驛下車池上電車ニ乗リ替へ池上  
驛下車

#### 中央線方面

新宿驛ニテ省線電車ニ乗リ替へ  
五反田驛ニテ池上電車ニ乗リ替へ池上驛下車

### 二、參拜

#### 一、國寶ノ御靈像

宗祖滅後七年六老僧日持聖人及侍從公日淨聖人ノ發願ニ依テ雕刻スル所大正十三年十月國寶ニ指定セラル、宗門無二ノ御尊像内外ノ渴仰尤モ深シ

#### 二、御眞骨堂

御遠忌記念事業ノ一トシテ七ヶ年ノ歳月ト二十萬ノ巨費ヲ投シ再建落成セ

#### 三、御靈寶拜觀

門外不出ノ御靈寶特ニ御遠忌法要中拜觀セシム

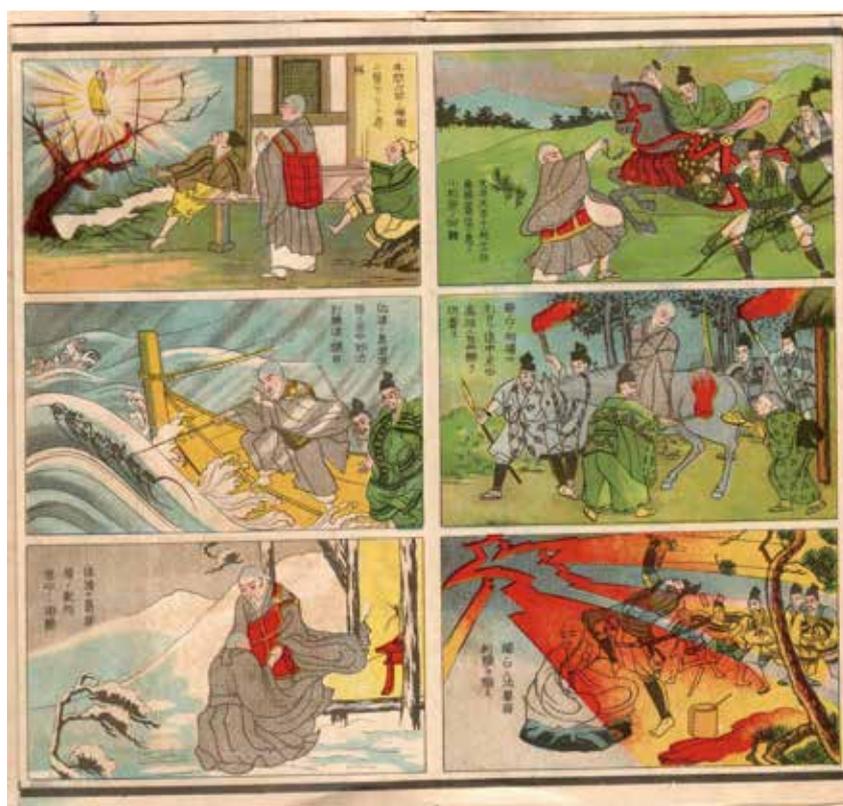
#### 三、附近ノ靈跡

洗足池 高祖大士身延山ヨリ池上へ御廟ノ御洗足セラレシ靈跡池上電車洗足池驛下車驛前

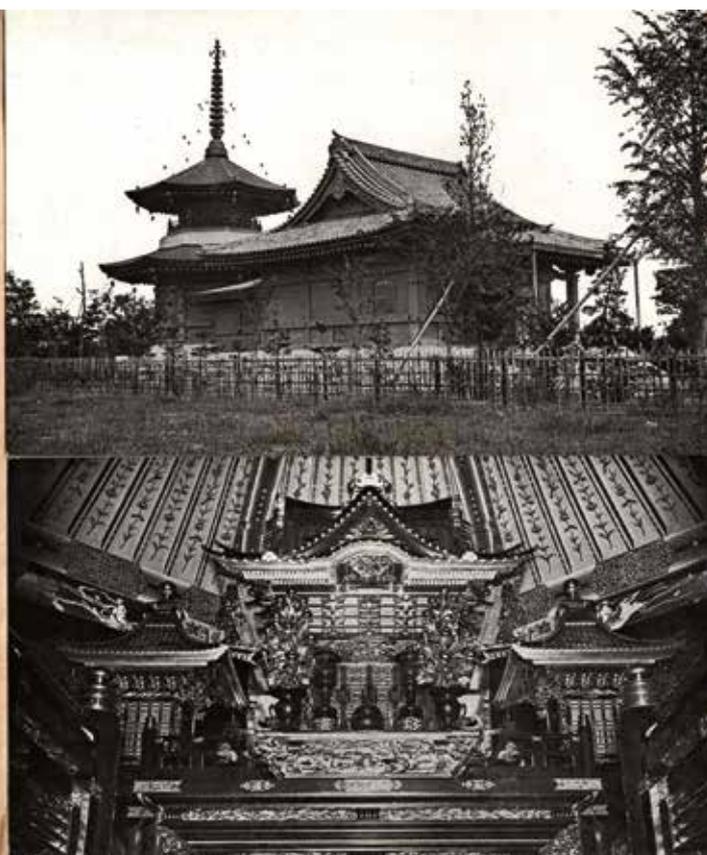
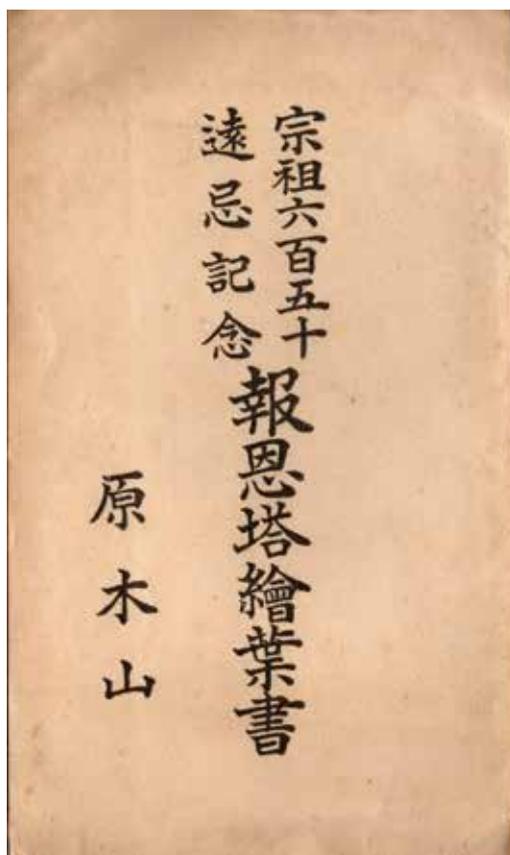
## 大本山 池上本門寺

(寄附 丸之内 三勇舎)

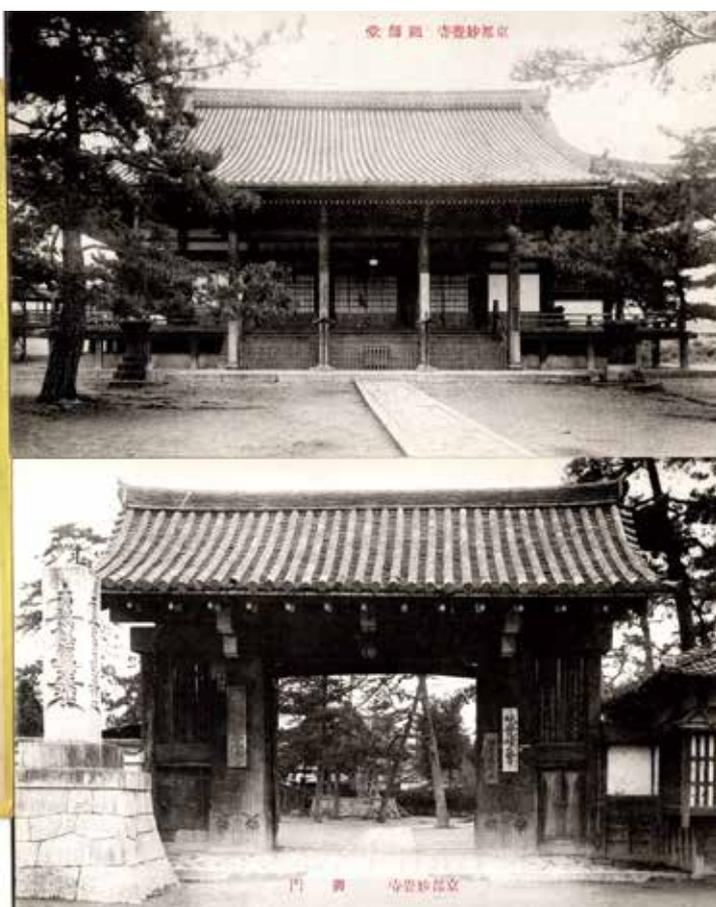




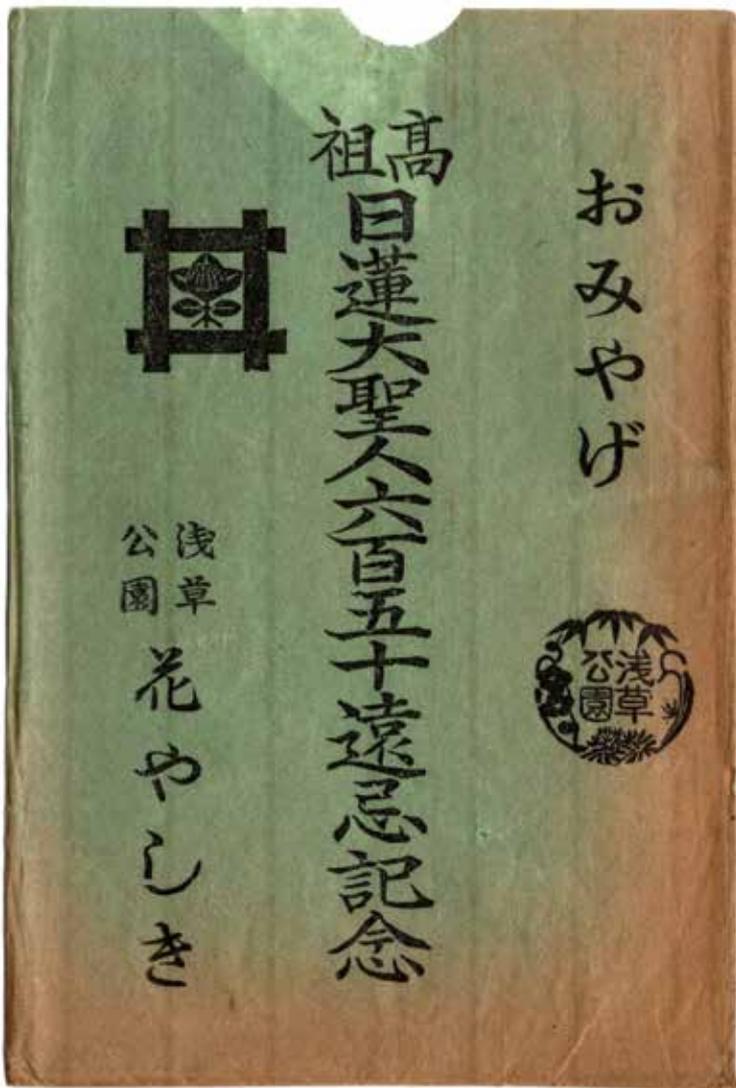
47 原木山報恩塔繪葉書



48 本山妙覺寺繪葉書



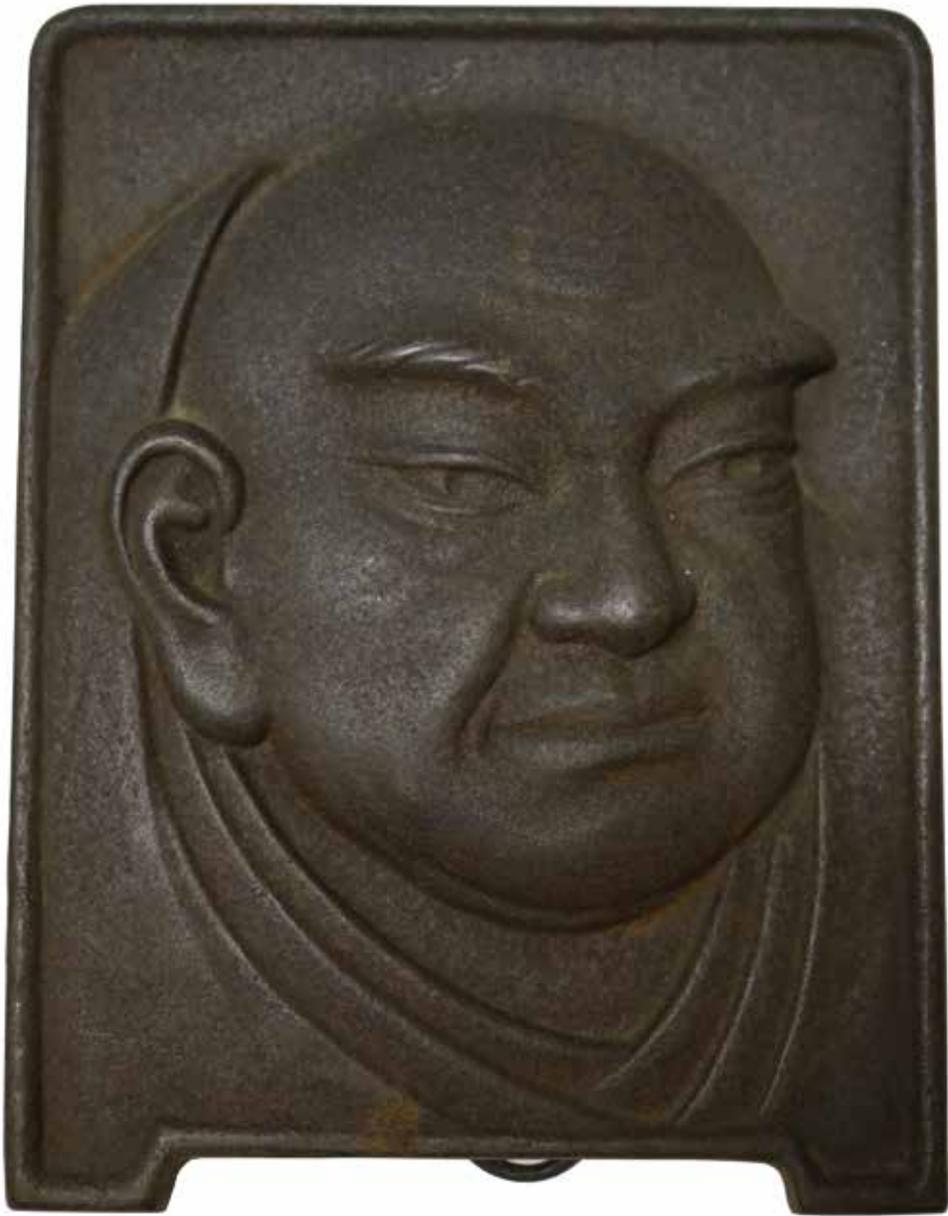




高祖日蓮大聖人六百五十遠忌記念  
花やしき日蓮大聖人御像

日蓮上人房小松氏に對して書きたる日蓮名

51 立正大師日蓮上人レリーフ



日 二 十 月 十

池上本門寺お會式

に樂に安く行くには

目蒲・東横電車  
直營乗合自動車  
連絡で!!!

◆下丸子驛より本山下まで乗合自動車連絡  
運轉時間延長

終夜運轉

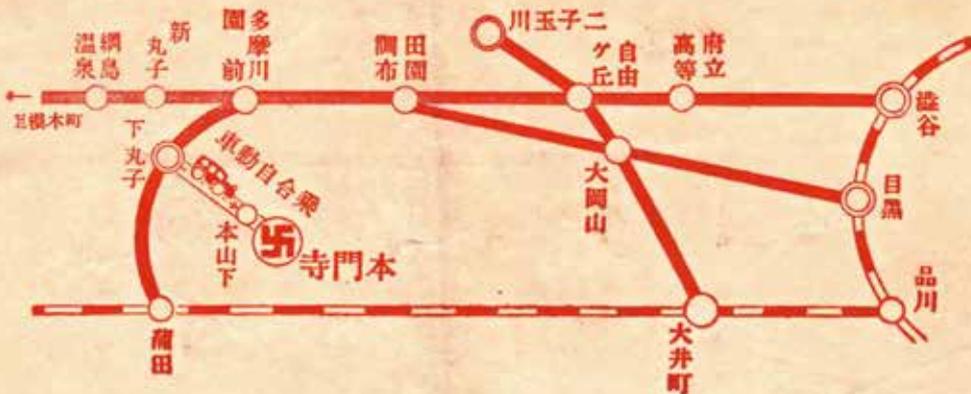
午前一時迄

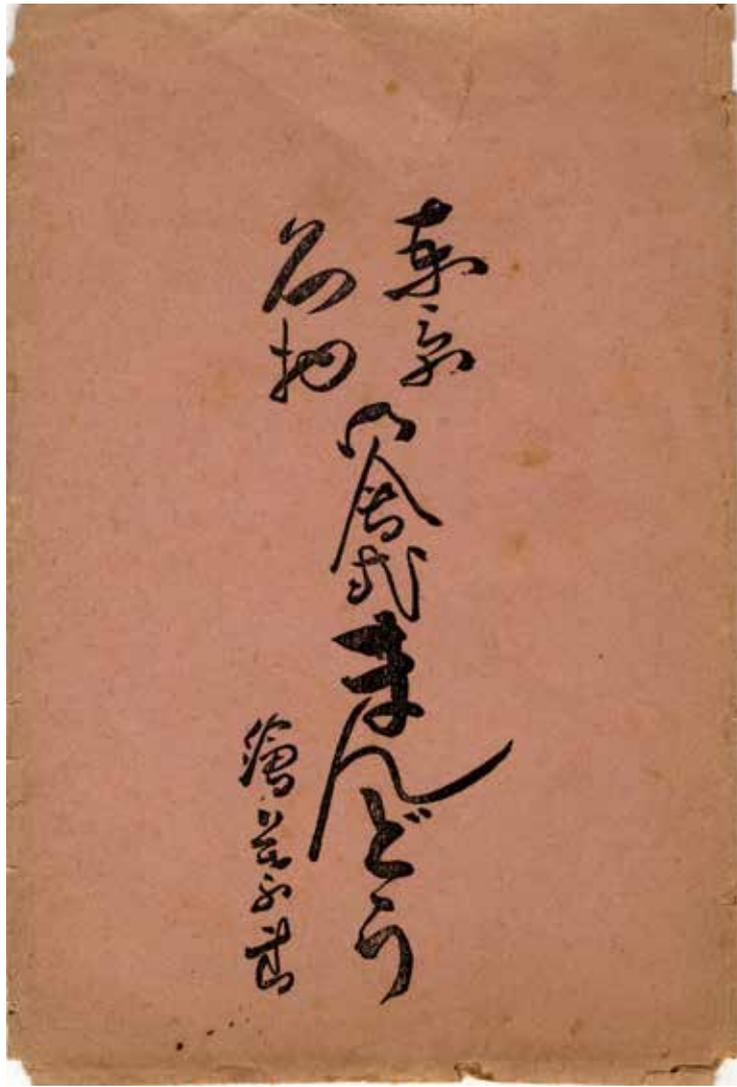
運賃大割引

本山下まで電車自動車連絡割引往復

目黒、大岡山間	大人 三十錢
二子玉川、九品佛間	大人 二十錢
大井町、洗足公園間	大人 二十錢
澁谷、府立高等間	大人 四十錢
櫻木町、綱島温泉間	大人 二十五錢
	小兒
	小兒 二十五錢

目蒲・東横電車







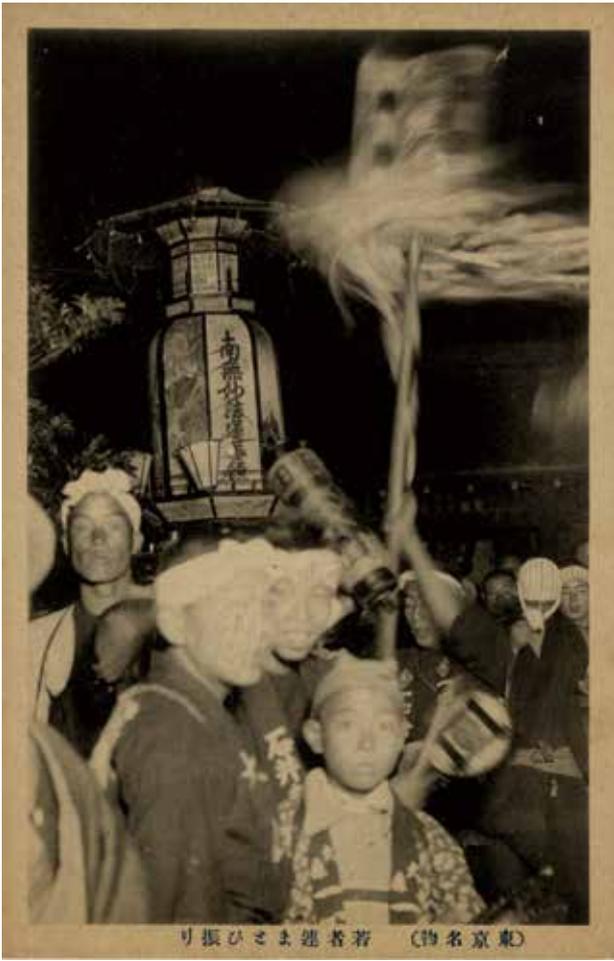
55

御会式まんどろ絵葉書

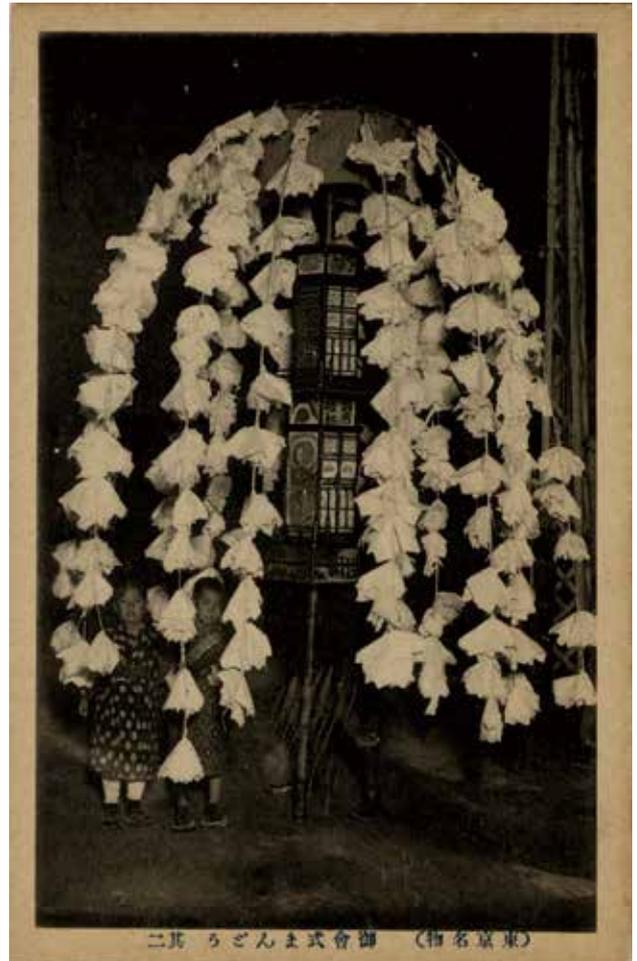


54

まんどろ出発の光景絵葉書



57 若者連まとい振り絵葉書

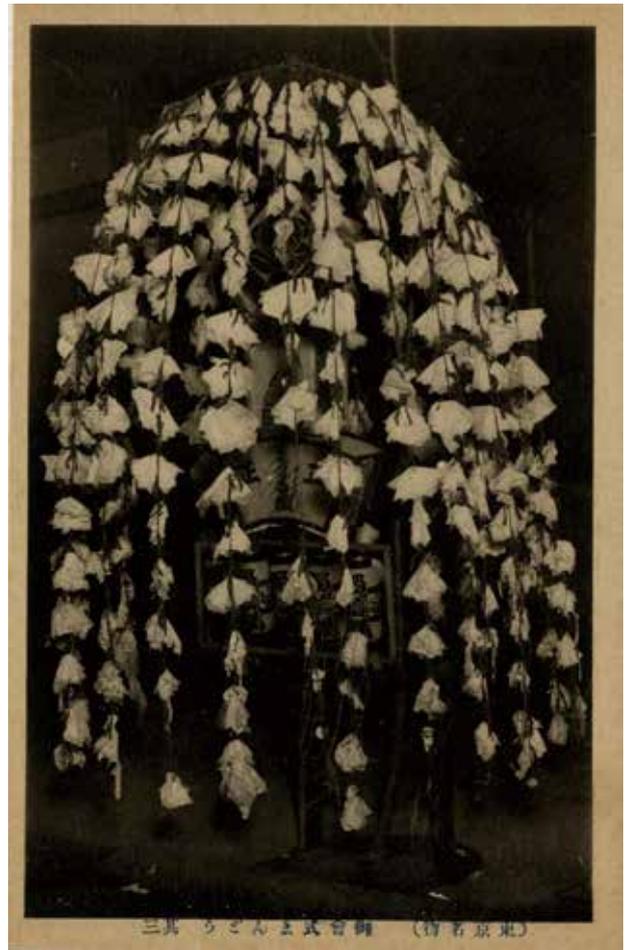


56 御会式まんどう絵葉書



ちどんま連供子 (特名京東)

59  
子供連まんどろ絵葉書



三其ちどんま式習舞 (特名京東)

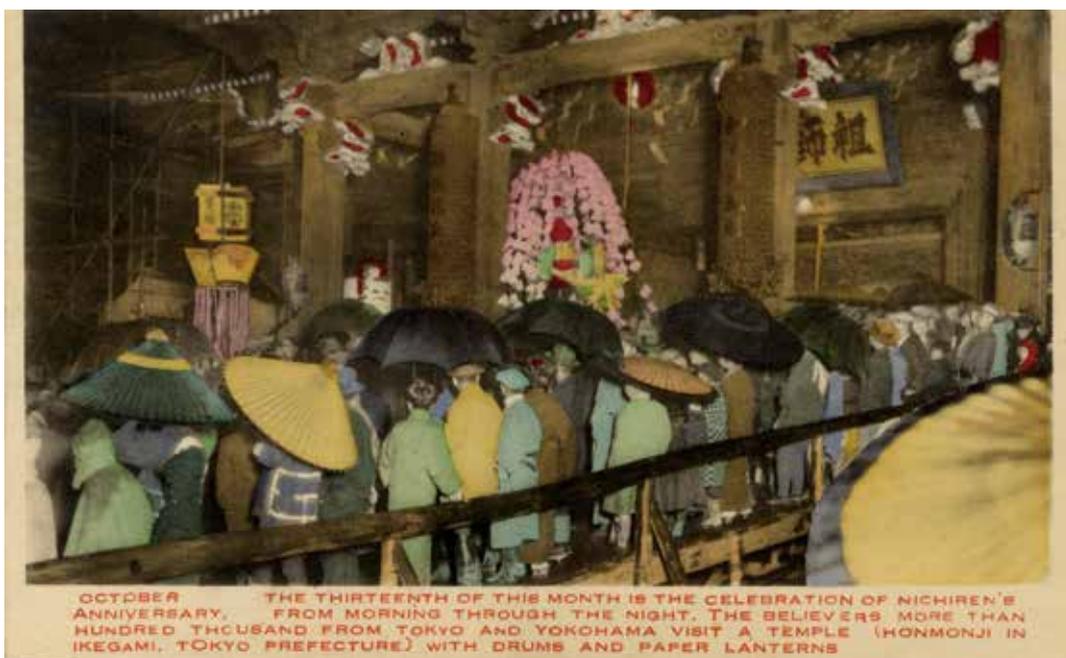
58  
御会式まんどろ絵葉書

60  
御会式桶まとい絵葉書



61  
まんどろ集合の光景絵葉書





身延別院立正閣御會式



63  
身延別院立正閣御會式繪葉書







主題流行歌  
松竹少女歌劇レビュー「秋のをどり」主題歌

# お 会 式

安東英男作詩・佐藤清吉作曲・奥山貞吉編曲



オ リ エ ・ 津 阪

合唱 松竹少女歌劇團聲樂専科生

伴奏 コロンビア・オーケストラ

(1)

おやじ禪宗 おふくる門徒

ヨイヨヤサノヨヤサツサ

おいら法華のお題目

ヨイヨヤサノヨヤサツサ

しんから信心ヨーイヨイヨヤサツサ

ヨイヨヤサノヨヤサツサ

-(28550)-

(Printed in Japan)

# 除厄祖師

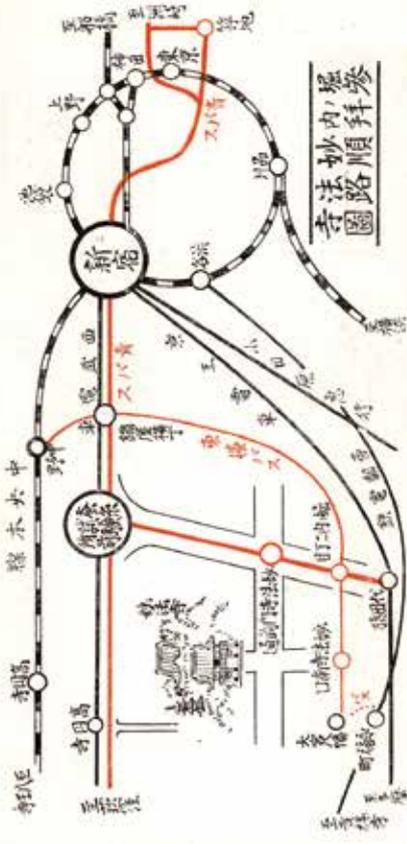


# 妙法寺

新  
版  
新  
版  
新  
版

文化十年に出版された妙法寺の案内本であり、また前方の御宇本、カワトはその表紙の文字です。

権之内まうで



● 特  
に  
十三日は祖師縁日  
十三日廿三日は廿三夜縁日  
尙甲子毎々大黒天ノ御誕アリ

## 年中行事

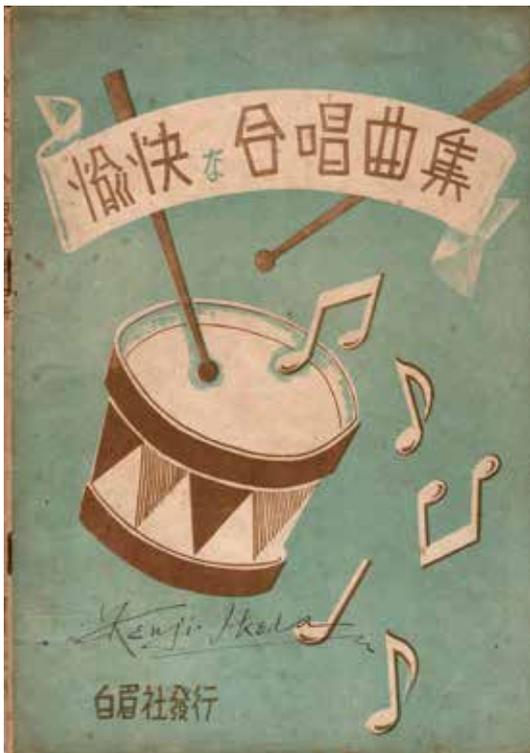
正月	元日二日三日六歳御祈禱會、十三日、内拜。	八月	十七日夕刻千部御經讀、十八日、廿八日マテ千部修行。
二月	節分豆撒午後二時、四時、十五日釋尊御涅槃會、十六日高野御誕生會、被拜中日大起願會、觀音會々員道形會。	九月	十二日服ノ口御誕生會、十三日内拜被拜中日大起願會、觀音會々員道形會。
三月	八日護國會、廿八日開宗會、廿九日天長節祝會。	十一月	八日マテマテ御會式、十一日小松原御誕生會、十九日七面天女祭禮。
四月	八日護國會、廿八日開宗會、廿九日天長節祝會。	十二月	廿一日既末御誕生會。
五月	八日マテマテ御會式、十一日小松原御誕生會、十九日七面天女祭禮。	右ノ外	毎月一日、八月、十三日、十五日、廿三日、廿八日御經日、十二日總夜縁。
六月	廿五日御誕生會、十三日内拜。		
七月	廿五日御誕生會、十三日内拜。		



1932年	昭和七年	<p>静岡県富士郡妙法講社、六百五十遠忌法要を浅間神社宝塔前にて修す</p> <p>十月二十七日、宗務院は初て房州清澄山にて御会式を行い、これより例行す</p> <p>十一月二十日、東京全生病院唱行会、会式を修し万燈行列を行う</p> <p>池上本門寺御会式にあたり警察から「纏禁止」「万灯は一人で持ち歩ける程度の物のみ、当日は此経難持坂の下まで」というお触れがでる</p> <p>御会式の池上本門寺境内で死なう団の団員がビラを配布しようとしたが警察の目に触れ未遂に終わる</p> <p>清澄山に於て立正大師開宗会並に会式慣行を永代慣例とする申請、真言宗智山派管長旭純榮これを認可す</p> <p>六月十二日、宗務院及び東京寺院主催にて東郷元帥の追悼会を池上本門寺で修す</p> <p>熊本本妙寺、日本橋白木屋に清正公の出開帳をなす</p> <p>池上本門寺の宗祖会式、初めて全国実況放送される</p> <p>日蓮宗、千葉県清澄寺堂内開放による最初の会式を修す</p> <p>十一月五日、東京身延山関東別院、会式及び国威宣揚国禱会を修す</p> <p>この頃、万灯の電化が進む</p> <p>ビクターから御会式行進曲レコードが発売される</p> <p>松竹少女歌劇レビュー秋の踊り主題歌お会式レコードが発売される</p> <p>東京浅草土富店長遠寺、祖師像開帳を行う</p> <p>宗務院は勅額拝戴宗祖六百五十遠忌要録を発行す</p> <p>お会式おどりレコードが発売される</p>
1933年	昭和八年	
1934年	昭和九年	
1935年	昭和十年	
1936年	昭和十一年	

1936年	昭和十一年	<p>九月六日、池上本門寺の会議で団扇太鼓の叩き方を時代に合わせて三拍子から二拍子に統制する事が決まる</p> <p>この年より池上本門寺御会式の参詣路として旧道を廃し新しく舗装された新道を使用することに</p> <p>信者にして本宗後援者たるアルゼンチン公使モンテネグロ氏送別会を池上本門寺にて開く</p> <p>日中戦争</p>
1937年	昭和十二年	<p>宗務院は池上御会式に際し文部省その筋の注意に依り万灯行列は宗門伝統の様式に従い軽佻浮薄のそしりを受けざるよう、また行列は整然として不真面目なる態度にあらざるようとの通牒を京浜宗門に発す</p>
1938年	昭和十三年	<p>九月十一日、神奈川県片瀬龍口寺、明日より燈火管制実施のためこの日に法難会を修す</p> <p>警視庁、各警察署を通じて講社その他の参詣団体に御会式参詣の自粛を要請す</p>
1939年	昭和十四年	<p>池上本門寺御会式にあわせ武運長久国禱会、英霊追悼会を修す</p> <p>第二次世界大戦</p>
1940年	昭和十五年	<p>釧路法華寺、会式及び戦没者追悼会を修し武運長久万燈行列を行う</p> <p>池上本門寺、会式及び武運長久祈願会・戦没者追悼会を修す</p>
1941年	昭和十六年	<p>日蓮宗宗務院東京府下寺院主催紀元二千六百年祝禱会を池上本門寺に修す</p> <p>池上本門寺御会式に伴い行われる終夜運轉の自粛要請が出される</p> <p>朝鮮新義州布教所、会式及び立正報国講演会を開く</p> <p>国立療養所東京多摩全生園、会式及び時局講演会を行う</p> <p>満州国内日蓮宗寺院、合同の会式を修す</p> <p>大東亜戦争</p>

1941年	昭和十六年	日蓮宗、大東亜戦争完遂敵国降伏戦勝祈願国禱会を池上本門寺にて修す
1942年	昭和十七年	長野県上田市本陽寺、会式及び武運長久祈願会を修す 千葉県南部宗務所、清澄山会式を修す
1943年	昭和十八年	宗務院、軍器献納奉告式及び聖戦完遂国禱会を池上本門寺にて修し、軍器献納資金二百五十万円を献納する 池上本門寺・小湊誕生寺・千葉県西部宗務所など、山本五十六元帥追悼会・アツツ島玉砕英霊追悼会を修す。 宗務院、玉体安穩敵国降伏国禱会を池上本門寺にて修す。祈禱宝贖を皇室及び陸海軍省に献納する 池上本門寺、会式及び大國禱会を修す
1945年	昭和二十年	東京大空襲により日蓮宗寺院五百八十五カ寺焼失する 四月十五日、池上本門寺空襲、祖師堂・釈迦堂・山門・大書院焼失す 終戦
1952年	昭和二十七年	大阪市布教師会、報恩万灯奉献唱頭行進並びにお会式を行う
1953年	昭和二十八年	身延山久遠寺、出開帳を東京日本橋高島屋にて行う
1960年	昭和三十五年	池上本門寺、大鐘楼落成祝賀式をあげる
1964年	昭和三十九年	池上本門寺、大堂完成遷座式をあげる
1966年	昭和四十一年	池上本門寺、大堂落慶式をあげる
1970年	昭和四十五年	日蓮聖人龍口法難第七百年記念報恩大法会、片瀬龍口寺にて修される
1971年	昭和四十六年	宗務院、日蓮聖人降誕七百五十年慶讃大法会を小湊誕生寺にて修す 池上本門寺、宗祖降誕七百五十年慶讃法会を修す



### 御會式行進曲

(混聲同部)

林 柳波作詩  
本居長雄作曲

Soprano  
 (一) みんなでそらで なむみさしはれんげき 同 . . . . .  
 (二) たんばはくぬせ . . . . .

Alto  
 (一) みんなでそらで ドンツクドンツクドン 同 . . . . .  
 (二) たんばはくぬせ . . . . .

Tenor  
 (一) みんなでそらで ドンツクドンツクドン 同 . . . . .  
 (二) たんばはくぬせ . . . . .

Bass  
 (一) みんなでそらで なむみさしはれんげき 同 . . . . .  
 (二) たんばはくぬせ . . . . .

こんやおましきおまつりだに なむみさしはれんげき 同 . . . . .  
 まんどにちらんさきだらに ドンツクドンツクドン 同 . . . . .

こんやおましきおまつりだに ドンツクドンツクドン 同 . . . . .  
 まんどにちらんさきだらに

こんやおましきおまつりだに なむみさしはれんげき 同 . . . . .  
 まんどにちらんさきだらに

同 . . . . . はやめにねりだせ) なむみさしはれんげき 同 . . . . .  
 いけむなかなか

同 . . . . . はやめにねりだせ) ドンツクドンツクドン 同 . . . . .  
 いけむなかなか

同 . . . . . はやめにねりだせ) ドンツクドンツクドン 同 . . . . .  
 いけむなかなか

同 . . . . . はやめにねりだせ) なむみさしはれんげき 同 . . . . .  
 いけむなかなか





解三古大夫小勇  
後藤錦笠 間若山五郎  
定松茂代作柳澤  
大島屋丸 藤松東齋齋  
鳥藤初小川次郎

日蓮上人生誕  
**七百五十年記念**  
納札睦會主 千加坊

彌右衛門 屋盛吉  
美子吉 小松次夫 山崎  
庄 鉄寺区啓 志井  
萩原茂 松野港石 吉  
山吉人 扇宮 吉話人

納札三月例會  
會納札睦  
主千加坊

奉了昭和十六年三月二十三日午時一終より  
上野摩利支天に於て奉儀致しませう候  
源三 鼓澤 幸全 山利 中 公 計 中 幸

石壁 菅住  
小林 新井米  
上津木 田芳  
先久出 島清  
美松 鶴原  
八船 珠生  
根岸園 今村  
藤田 阿部  
池上 子崎庵  
清重 河鉄  
六番 中及組  
同清 甲唐  
山崎 甲家  
吉井 森三  
西田 藤友  
身行 石吉

盛志 信太郎  
金丸 川島  
清水堂 小山  
今半 渡部 武  
釜山 春光 伸  
美傳 直  
永野 福 光  
雷おは 花を  
三 藤 長  
草津 清水 忠  
川田 中 徳  
水窪 美家 田

辰宮家 山昭  
佐藤重 五友田  
深沢 二 公香園  
井上 芳 壽政  
森仙 壽井  
町田 長 増山  
藤一 山本  
村田 幸 湖家  
古田 桂 東  
藤藤 手 中組  
水橋 愛 堀祐  
堀内 仙 元 西川  
早瀬 山岡  
一 孫 花むら  
江崎 大塚 井上 珠慶 子 藤 鶴 庄 酒 藤 櫻 井 藤 彌 敦 勝 田  
子 孝 山 吉 人 錦 徳 徳 永 七 藤 正 子 代 若 子 赤 城 技 費 横 山

大新 中昭  
大 金 芥 藤 志 子  
古松 塚 千 成  
古 也 人 今 竹  
田 中 團 栗 院  
一 麓 松 岡  
松山 堂 加 加 野  
山 本 金 龍  
山 本 金 龍  
おのわ 大 初  
砂 中 徳 和 中 香 じ り 金 泉 中 藤 夫 羽 根 新 家 福 田 幸  
網 小 川 馬 場 三 幸 佐 武 郎 井 上 西 彫 錦 花 村 庄 千 加 坊 松 野 港 扇 宮

72 千加坊千社札



73 神田八講千社札





高  
川  
銅  
清

南無妙法蓮華經  
銅清千社札





1972年	昭和四十七年	千葉県小湊誕生寺出開帳並びに「日蓮聖人ゆかりの靈宝展」、東京新宿三越デパートにて開かれる
1975年	昭和五十年	東京西部日蓮宗青年会、冊子「お会式布教資料——七百遠忌報恩をめざして」を発行する
1976年	昭和五十一年	身延山久遠寺、七百遠忌記念身延山研修道場落慶式をあげる
		日蓮聖人七百遠忌報恩奉行会事務局、報恩事業を推進する
		管長望月日滋、昭和五十六年宗祖七百年正当遠忌宗風宣揚の教旨を伝達する
		宗務総長渡部公允、宗祖七百年遠忌浄業円成の論達を発する
		宗務院、日蓮宗新聞七百遠忌特集号を発行する
1977年	昭和五十二年	三波春夫、「大日蓮」奉唱式を池上本門寺にて行う
1979年	昭和五十四年	七百遠忌報恩奉行会事務局、遠忌記念写真集「日蓮聖人」をサンポウジャーナル社より出版する
		萬屋錦之助主演の映画「日蓮」ロードショー、各地にて始まる
		池上本門寺、七百遠忌記念事業のご廟所建立工事進み、日蓮聖人ご真骨奉安式をあげる
		七百遠忌報恩事業の前進座「日蓮聖人」劇東京公演、嵐圭史の日蓮聖人により読売ホールにて開幕する
1980年	昭和五十五年	池上本門寺、御廟所・山門・大客殿建設などの遠忌報恩事業完成し、落慶奉告音楽大法要を修す
		日蓮聖人第七百遠忌報恩奉行前会宗徒総決起の年に入る
		日蓮聖人第七百遠忌事務局、遠忌の布教方針を「日蓮宗新聞」に発表する
		むこう三カ年間、七百遠忌報恩奉行実施期間に入る
		沖縄県琉球山法華経寺へ奉遷の東京羽田長妙講寄進による日蓮聖人坐像御魂抜き法要、東京池上本門寺にて修される 十月十一日から十三日にかけて身延山久遠寺、日蓮聖人第七百遠忌前年大法会を修す

1981年

昭和五十六年

日蓮宗新聞社、「正法―臨時増刊七百遠忌特集号」を発刊する

四月一日より十日まで身延山久遠寺、日蓮聖人第七百遠忌前期法要を修す

日蓮聖人門下連合会・読売新聞大阪本社、第七百遠忌記念「日蓮聖人展」を開催す

身延山久遠寺、四十五万国百五十名参加のもとに世界宗教者集会七百遠忌特別法要を修す

四月二十五日から二十九日、東京池上本門寺、日蓮聖人第七百遠忌御報恩大法要前会を修す

身延山久遠寺、日蓮聖人第七百遠忌ご正当中期大法会を修す

福岡県鎮西身延本仏寺、第七百遠忌報恩法要・本仏寺創立百周年・日蓮聖人御真骨分与百年祭を行う

宗務院、日蓮聖人第七百遠忌御報恩「日蓮宗全国大会」を東京千代田区日本武道会館にて開く。僧俗一万人結集す

身延山久遠寺、遠忌記念報恩橋起工式・地鎮式をあげる

日本テレビ、日蓮聖人第七百遠忌報恩全国大会並びに全国縦断唱題行脚を「宗教の時間」に全国放送する

七百遠忌記念「日蓮聖人註画讃」角川書店より発刊する

宗務総長塩田義朗、七百遠忌の意義を「日蓮宗新聞」に発表する

第七百遠忌報恩奉行会、ラジオドラマ「炎のごとく」のキャンペーンを東京銀座にて展開する

第七百遠忌報恩奉行会、連続ラジオドラマ「炎のごとく」をTBS系放送より全国放送する

十月六日から十五日、身延山久遠寺、日蓮聖人第七百遠忌御正当法要を修す

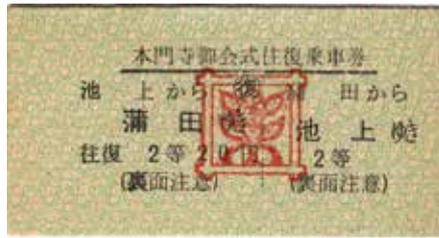
十月九日から十三日、東京池上本門寺、第七百遠忌御報恩大法会・正当会を修す

十一月二十一日から二十三日、東京池上本門寺、日蓮聖人第七百遠忌後会を修す

池上本門寺、「法華ひらく―日蓮大聖人第七百遠忌要録」を発刊する

1982年

昭和五十七年



日蓮大聖人とともに



日蓮聖人 御報恩大会 記念誌  
第七百遠忌

日蓮宗大阪市宗務所



身延駅

普通入場券 110円  
 旅客車内立ち入ることはできません。  
 発売当日1回限り有効



身延から

下部 ゆき 130円

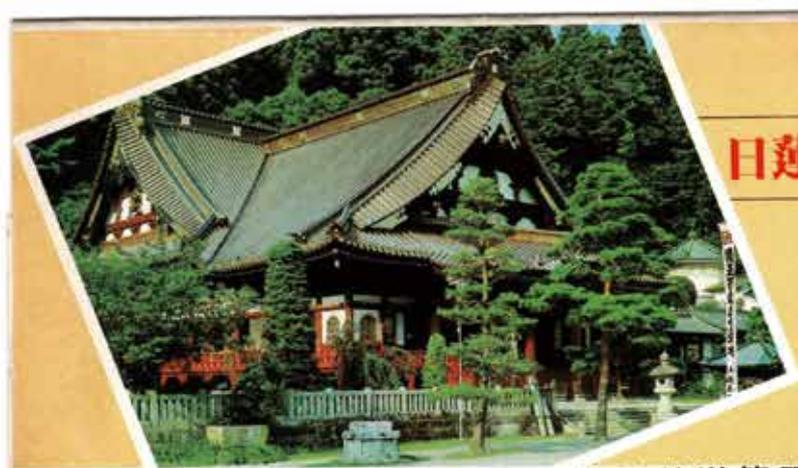
発売当日限り有効  
 下車前途無効  
 ①身延駅発行



身延から

下部 ゆき 60円

発売当日限り有効  
 下車前途無効  
 ①身延駅発行

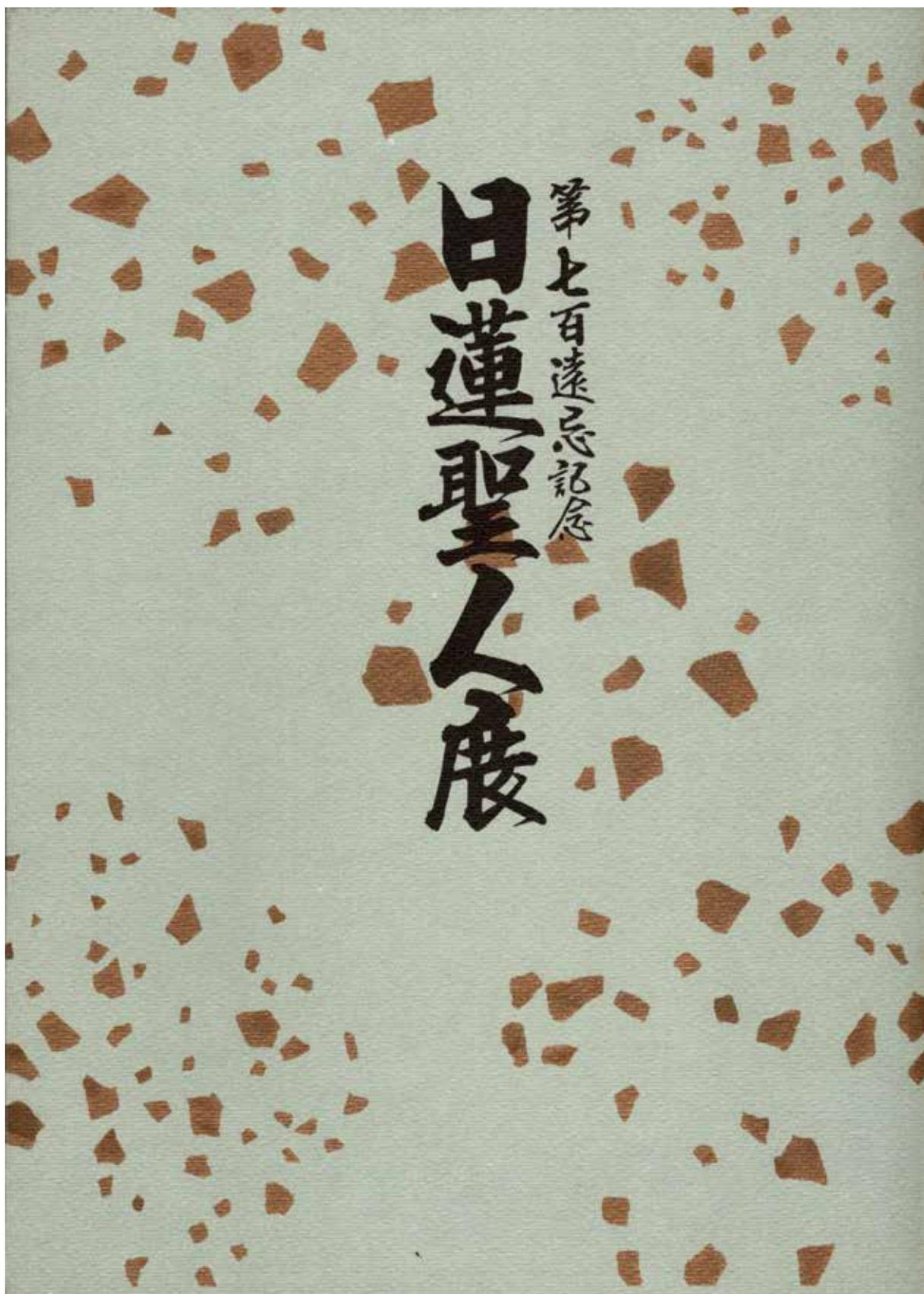


日蓮聖人第七百遠忌

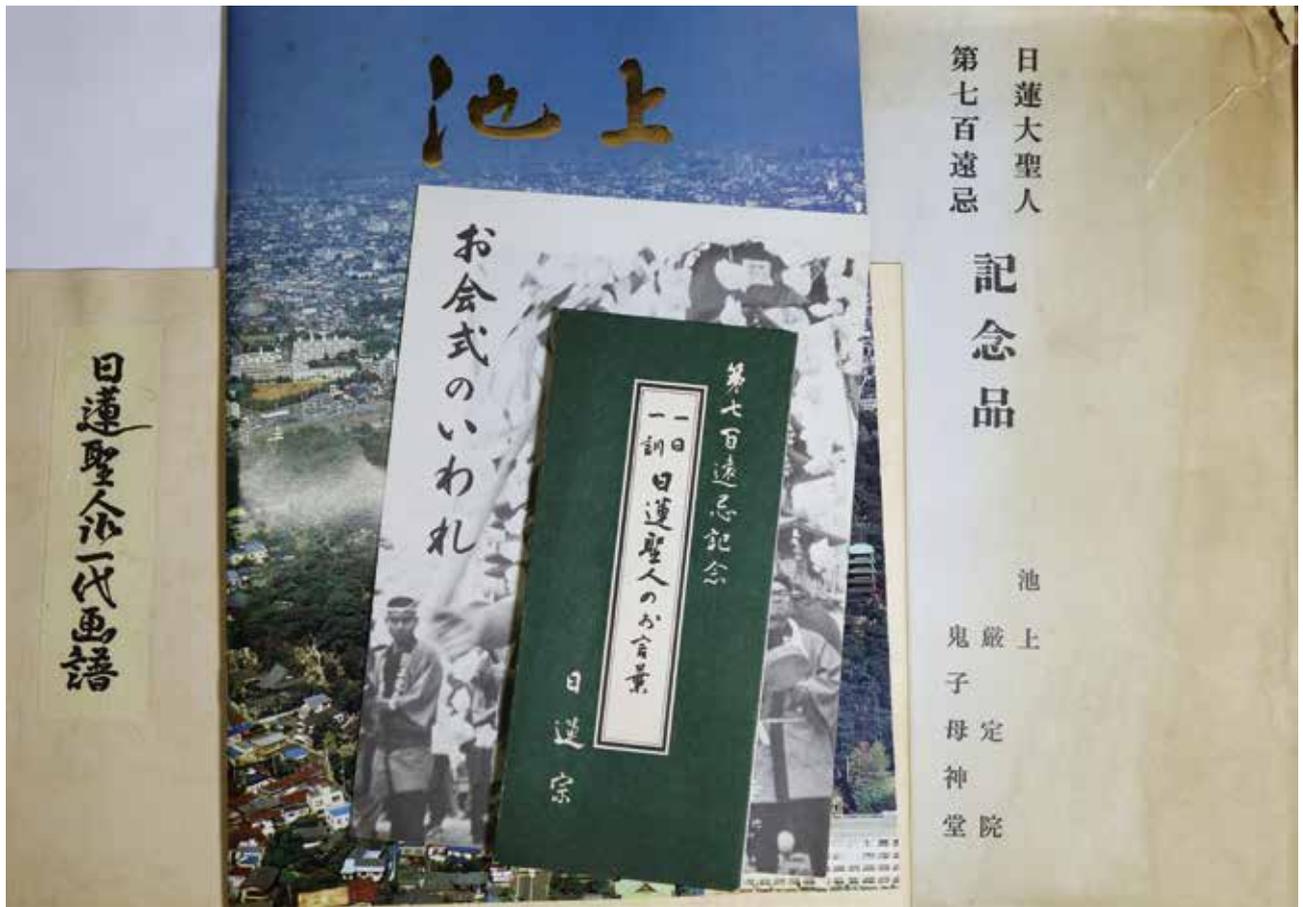
記念入場券  
 記念乗車券

1981 静岡鉄道管理局









日蓮聖人一代画譜

池上

お会式のいわれ

第七百遠忌記念

一日日蓮聖人のが言葉

日蓮宗

日蓮大聖人  
第七百遠忌

記念品

池

上  
鬼殿  
子定  
母神  
堂院

84 日蓮大聖人第七百遠忌記念品



# 日蓮大聖人第七百遠忌

昭和56年御遠忌大法会

正当会 / 10月9日～13日  
後会 / 11月21日～23日

大本山 池上本門寺



### 団体参拝はバス2台が快適です！

貴寺が団体参拝をご計画なさいます場合、一団体・120名前後（バス2台）とした編成をお考えいただけます。当山といたしましては万全のお迎えが出来るかと存じます。

### 団体参拝についてお願い

当山へのご参詣は是非ごゆるりとお時間をいただきたいのですが、ご都合でどうしてもお急ぎになられる場合もございますので、参拝部署として下記のような三つの予定をたててみました。お役に立つようでしたら団体をお申込みの折に、あらかじめご予定のコースをご指示くださいましたら、そのように準備してお迎え致します。

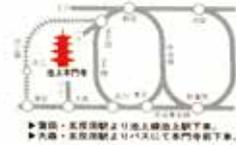
- ① 大堂参拝（約40分）
- ② 遠忌法要並び境内案内（仁王門～ご願所）約1時間10分
- ③ ①②並び大坊案内（お寄り掛りの柱・お会式様）約3時間
- ④ 朝峰会館一泊・朝勤並び①②③

### 正当会・後会の参拝宿泊について

正当会（10.9～13）、後会（11.21～23）の団体宿泊は満員の為締切らせていただいております。なお近くの旅館、ホテルをご紹介いたしますので詳細は参拝部へお問合せ下さい。★但しおこもりをご希望の方はお申込み下さい。（1,000名迄）

「お会式」で有名な当山は、今から約七百年の昔、弘安5年（1282年）10月13日朝、日蓮大聖人が御年61歳をもってご入滅（ご臨終）遊ばされた霊跡で、長栄山本門寺の名は、当山をご寄進になった池上宗神公の請により、日蓮大聖人がおつけになられたものです。大堂におまつりするご尊像は、中老僧日法上人が日蓮大聖人ご在位の御姿を想いで護国されたご本像で、国宝に指定されております。

日蓮宗  
大本山 池上本門寺  
東京都大田区池上1-1-1(〒146)  
TEL 東京03 (752) 2 3 3 1 40



### 後会

**誓願** 日蓮大聖人は、六老僧をはじめとする多勢の弟子檀越に、法華経広宣流布の使命を托して御入滅なされ、その遺命を奉じる人々の不惜身命の布教のおかげによって、今の私達は正しい法華経の教えに浴しています。私達がこの大恩に報いるためには、一人一人が正法をしかりと身に付け、後から続いてくる人々の先達として、日蓮大聖人の法華経をひろめてゆくことに努めなければなりません。三日間六座に亘る法要は、末法万年の未來までも法華経を弘めようとの誓願をかたちにあらわしたものであります。

### 正当会

**聞法** 御遠忌が五十年に一度つづおつとめされてきたということの意味のひとつには、「門下のあるべき様を問ひ直し、進むべき方向が誤っていないかどうかをみつめ直す時である」ということがあると思ひます。では、こうした時の問ひ直し、見つめ直しは何によればいいのか、法華経に聞き、宗祖にたずねる他はないでしょうか。如来寿量品礼讃、立正安国論礼讃などは、この意義付けによって組まれております。また、御正当の時にあたり、法華経一部八巻を説誦し、聞法の精神を一層深くすべく、五日間十座に亘る法要を営みます。

### 前会

**結縁** 一天四海皆妙法、仏国土の建設という日蓮大聖人の誓願を達成するためには、一人でも多くの人々にお題目の縁を結ばなければなりません。お題目の縁を結んでこつていく結縁とは、私達の方から仏さまに近づいて、積極的に仏道の修行に励むという事です。こうした意義付けによって法華懺法会、得度授戒会、檀信徒結縁法要を四月二十五日より四月二十九日の五日間十座に亘つて、おつとめいたしました。

## 昭和五十六年 日蓮大聖人第七百遠忌御報恩大法会

後会 誓願	正当会 聞法
十一月二十一日 午後二時	十月九日 午後十時
十一月二十二日 午後二時	十月十日 午後十時
十一月二十三日 午後二時	十月十一日 午後十時
	十月十二日 午後十時
	十月十三日 午後十時
	十月十四日 午後十時
	十月十五日 午後十時
	十月十六日 午後十時
	十月十七日 午後十時
	十月十八日 午後十時
	十月十九日 午後十時
	十月二十日 午後十時
	十月二十一日 午後十時
	十月二十二日 午後十時
	十月二十三日 午後十時
	十月二十四日 午後十時
	十月二十五日 午後十時
	十月二十六日 午後十時
	十月二十七日 午後十時
	十月二十八日 午後十時
	十月二十九日 午後十時
	十月三十日 午後十時
	十月三十一日 午後十時

万灯練供養 近在万灯講中総出仕  
正当会 十月 九日 午後七時～十時  
十日 午後七時～十時  
十一日 午後七時～十時  
十二日 午後七時～十時  
後会 十一月二十一日 午後六時～十時  
二十二日 午後六時～十時  
二十三日 午後六時～十時  
近在万灯総結集

**万灯練供養** 近在万灯講中総出仕 大本山 池上 本門寺

**法華ひらく**

日蓮大聖人第七百遠忌御報恩大法会

正当会 10月9日〜13日  
後会 11月21日〜23日



**団体参拝はバス2台が快適です！**

貴寺が団体参拝をご計画なさいます場合、一団体・120名前後（バス2台）とした編成をお考えいただけましたら、当山といたしましても万全のお迎えが出来るかと存じます。

**団体参拝についてお願い**

当山へのご参詣は是非ごゆりとお時間をいただきたいのですが、ご都合でどうしてもお急ぎになられる場合もございますので、参拝部案として下記のような三つの予定をたててみました。お役に立つようでしたら団参をお申込みの折に、あらかじめご予約のコースをご指示いただきましたら、そのように準備してお迎え致します。

- ① 大堂参拝（約40分）
- ② 遠忌法要並び境内案内（仁王門〜ご願所／約1時間30分）
- ③ ①②並び大坊案内（お寄り掛りの社・お会式程／約3時間）
- ④ 朗峰会館ご一泊・朝勤並び①②③

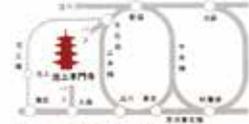
**正当会・後会の参拝宿泊について**

正当会（10/9〜13）、後会（11/21〜23）のおこもりをご希望の方は参拝部へお問合せ下さい。

「お会式」で有名な当山は、今から約七百年の昔、弘安5年（1282年）10月13日朝、日蓮大聖人が御年67歳をもってご入滅（ご歸終）遊ばされた霊跡で、長栄山本門寺の名は、当山をご寄進になった池上宗仲公の請により、日蓮大聖人がおつけになられたものです。

大堂におまつりするご尊像は、中老僧日法上人が日蓮大聖人ご在徳の御姿を徳んで雕刻されたご本像で、国家に指定されております。

日蓮宗  
大本山 池上 本門寺  
東京都大田区池上1-1-1(平146)  
TEL 東京03 (752) 2 3 3 1 60



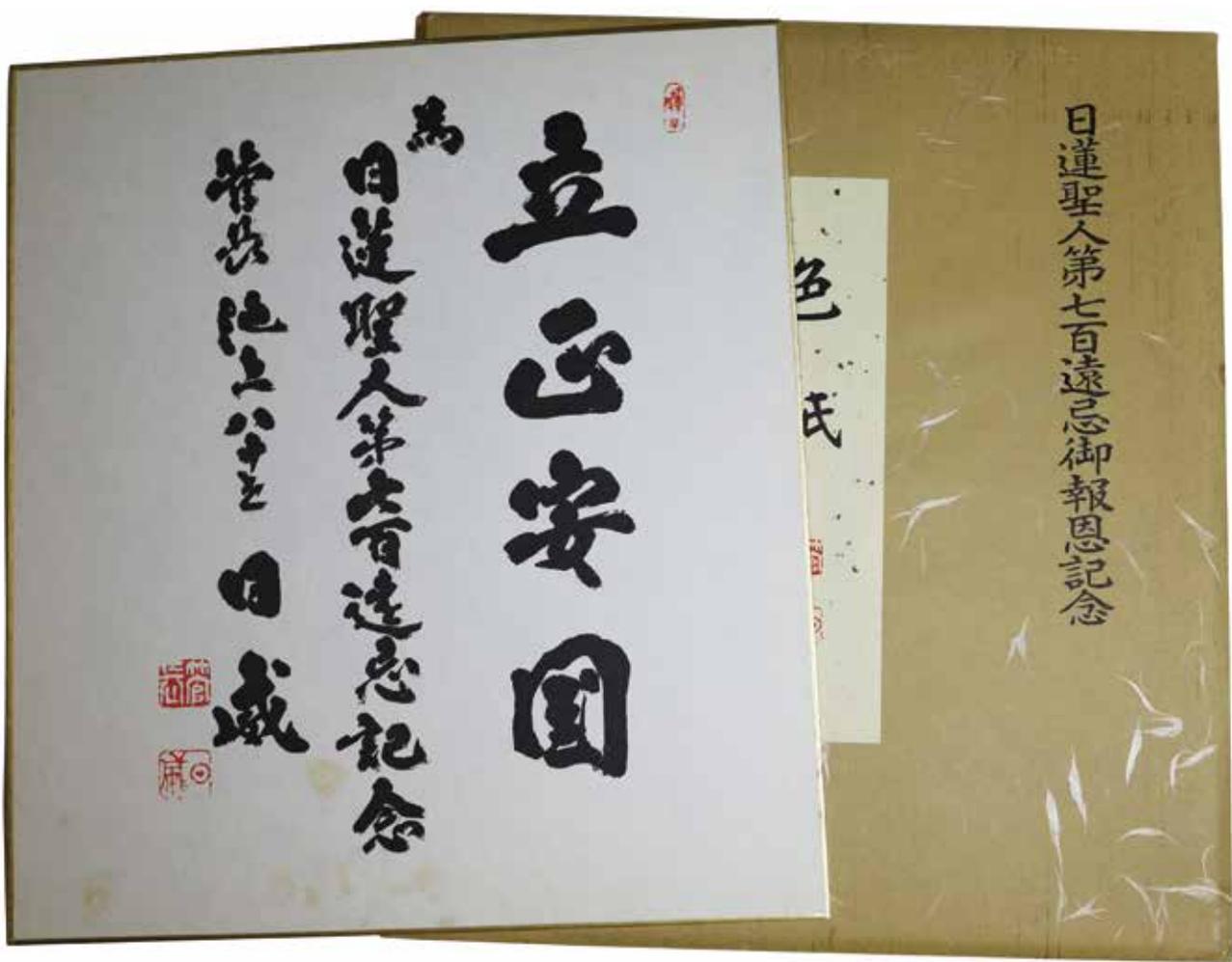
▶ 池上・五反原より池上線池上駅下車。  
▶ 大森・五反原駅よりバスにて本門寺前下車。

☆万灯練供養 十月九・十日・十一日 午後七時〜午後十時 京浜・近郊万灯講中の参加大歓迎  
十月十二日 午後六時〜午後十二時 二部参加の目を予め二報ください。

十月十三日 火	十月十二日 月	十月十一日 日	十月十日 土	十月九日 金
<p>臨滅度時法要・庭儀・御廟前法要</p> <p>午前八時</p>	<p>◎全国相信徒による報恩法要</p> <p>方便品 自我偈と 唱題行と (宗祖御更衣式)</p> <p>午前十時</p>	<p>◎池上奉賛会による報恩法要</p> <p>方便品 自我偈と 唱題行と</p> <p>午前十時</p>	<p>◎京浜地区並び近郊の結社・講中による報恩法要</p> <p>少年少女による報恩法要</p> <p>朗子クラブ スポーツクラブ等</p> <p>午前十時</p>	<p>◎宗門主催報恩法要</p> <p>宗門主催報恩法要</p> <p>午前八時</p>
<p>◎宗門主催報恩法要</p> <p>午後二時</p>	<p>◎本門寺相信徒による報恩法要</p> <p>法華経読誦法要</p> <p>午後二時</p>	<p>◎本門寺相信徒による報恩法要</p> <p>御書札講法会 (立正安国論)</p> <p>午後二時</p>	<p>◎本門寺相信徒による報恩法要</p> <p>御書札講法会 (立正安国論)</p> <p>午後二時</p>	<p>◎宗門主催報恩法要</p> <p>宗門主催報恩法要</p> <p>午前十一時</p>
<p>◎宗門主催報恩法要</p> <p>午後七時</p>	<p>◎宗門主催報恩法要</p> <p>法華経読誦法要</p> <p>午後二時</p>	<p>◎宗門主催報恩法要</p> <p>法華経読誦法要</p> <p>午後二時</p>	<p>◎宗門主催報恩法要</p> <p>法華経読誦法要</p> <p>午後二時</p>	<p>◎宗門主催報恩法要</p> <p>宗門主催報恩法要</p> <p>午後七時</p>

昭和五十六年 日蓮大聖人第七百遠忌御報恩大法会

正当会 日程並び法要内容



87

日蓮聖人第七百遠忌記念色紙

# 法華ひらく

日蓮大聖人第七百遠忌

昭和五十六年

大本山 池上 本門寺











92  
絵入り官製はがき









# 作品解説

## 1 高祖日蓮大菩薩御涅槃図

大坊本行寺  
500×380mm

涅槃図といえは釈尊涅槃図だが、これはそれを模して宗教的装飾を一杯施して制作された宗祖涅槃図で、「ここでこういうことがありました」と、ある意味大坊土産と言える授与品。年代未詳だが時間を置いて数多く刷られたよう時代を経た物でも比較的現存している。

寺院でも御会式の際、宗祖涅槃図を展示公開する例は多いが、これもまた釈尊涅槃図に釈尊涅槃図を一年に一度展示公開する例に倣った習慣。

## 2 高祖御一代畧図

玉泉齋法眼瑠山藤好信筆  
570×400mm 木版  
寛政八年

絵師の玉泉齋法眼瑠山藤好信は、他に深見要言編著「蒙古退治旗曼荼羅記」に法眼瑠山藤原好信行年七十歳写之と見える以外詳細不明。

各場面の題名のみで解説文はないことから、絵説きにも利用されたと思われる。

## 3 新版日蓮聖人御一生記

玉川文浪画  
470×350mm 木版  
一八〇〇年代

絵師の玉川文浪の作品はロシア国立プーシキン美術館に一点だけ収蔵されているのが確認できた。同館によると一七九五〜一八一〇年代に江戸を拠点として活動したという。

## 4 日蓮大菩薩御一代記

日澄著 歌川国丸筆  
文化十一年再刻 上下二冊

漢文体で一般大衆向けではなかった日蓮聖人註画讃を読み易いように「かな付き絵入り」として改題発行したもの。江戸期の祖師信仰の高まりに需要を見出した本だが、これら多数出版された読み易い祖師伝により祖師信仰は益々盛んになり、新たな信者を獲得するのに大きな力となったことは想像に難くない。

## 5 身延鑑

日亮著  
宝暦十二年 身延山蔵版 上中下三冊

身延山久遠寺御会式に参詣する人に限り関所通過時の通行料を免除するという「会式関免許」についての記載がある。この特権は武田晴信（信玄）が家臣へ「身延山会式について、両口の往復恒例のごとく申し付け候」と指示したのが最初と言うが、それ以前から慣例としてあったものを踏襲したのだろう。以後、武田家滅亡後には徳川家康というように代々の統治者によりその特権は認められている。

## 6 増山井四季之詞

季吟著  
寛文三年

十月の季語として「御影講 十三日日蓮上人忌日」とある。ヲメイとルビがあることから、他宗の御影（ミエイ）と明確に区別されていることが分かる。

「おめいこう」というのは御会式と同じ意味の言葉で、どちらかという御会式という呼び方より古いようである。御命講とも書き、松尾芭蕉の

御命講や 油のやうな 酒五升  
菊鶏頭 切り尽くしけり 御命講

などにも使用例を見ることが出来る。また地方によつては「おめいこう」が詰まって「おめこ」「おめご」と言うが、漢字にするといずれも御命講で、御会式のことである。

## 7 五百五十遠忌御報恩祖師像

善住寺

155×360mm 木版

天保二年

天保二年に迎えた日蓮聖人第五百五十遠忌に合わせて制作ないし、既存の版に遠忌報恩の文字を追加したと思われる。おそらくは遠忌記念法要参列者にお札のような形で授与されたと思うが、この手の祖師像や諸天善神像は出開帳時の授与品としても貴重な収入源だったようで、そういったものと刷物の祖師像の脇に開眼主何某とか出開帳の砌授与した旨が記載されている。

## 8 日蓮聖人御法海

大阪松町加嶋屋清助板

浄瑠璃の床本。人形浄瑠璃や歌舞伎で日蓮物というと十二月といえば忠臣蔵というように、御会式の頃にかかる演目の定番で、かなりの集客を見込めるものだった。上方では御会式の頃に日蓮物をかける芝居小屋の脇に祭壇を組んで、日蓮聖人御真筆（とされる）の本尊を拜ませ開帳料をとるということもあったらしい。三升屋二三治「紙屑籠（天保十五年序）」に次の記録があるので紹介する。

法恩日蓮記浄瑠璃は、年々堺町肥前座の操にて勤る。

大切にいたり、日蓮正筆の御曼陀羅大掛物を飾りて、老若の見物におがませる。諸見物参銭をなげて拝む。この御正筆は人形藤井幸蔵所持の御掛地故、年々十月日蓮記には幸蔵より出るすといふ。この年文政の頃まで勤る。今年毎にはなし。

## 9 日蓮聖人御法海

写本

浄瑠璃の床本。年代等詳細不明。このような浄瑠璃をはじめ伝統芸能の世界には、日蓮聖人あるいは法華氣質というものを題材にした作品が数多くある。しかし現状あまり日蓮宗では評価されていないのか、演じる機会を設けようなどという動きはないようである。

## 10 身延山朝参之図

国周

730×375mm（三枚分） 木版

文久二年

身延山朝参りといっても身延山久遠寺への朝参りではなく、出開帳先のお寺への朝参り。静々とお参りというのとは無縁で、万灯持って太鼓叩いてと、これが連日行われるので苦情も大分多かつたらしい。

出開帳の朝参りを題材にした作品としては、広重二



代の身延山朝詣群衆新大橋之景が有名で、実在した講の万灯の意匠や風俗がはっきり分かり史料の価値が高い。

こちらの作品は歌舞伎の一場面なのか（歌舞伎の一場面でのこのようなものがあるのか不明だが）、国周は

同様の朝参り役者絵をもう一種描いている。

### 11 江戸自慢三十六興 池上本門寺会式

豊国三代・広重二代

225×325mm 木版

元治元年

本門寺の御会式ポスターにも用いられたことがある。御会式を題材にした絵画作品の中で最も有名な一枚。

### 12 高祖日蓮大菩薩歌題目

135×180mm

昭和二年

歌題目の歌詞を書きとつたもの。なかに六百遠忌頃に作られた歌詞なのか、「高祖日蓮大菩薩六百遠忌御報恩にて南無妙法蓮華経」というものがある。

### 13 武蔵百景之内 池上本門寺

小林清親

250×350mm 木版

明治十七年

池上本門寺御会式を題材にした貴重な絵画作品のひとつ。ただ、御会式あるいは御会式史の視点から見ると情報量が少ないのですこし残念。

### 14 戯画帖より十月池上のお会式

作者未詳

昭和十四年

序文によると八十二歳になる作者が若かりし頃遊び歩いた東京の風俗を描いたとある。十二か月分のその月を代表する行事が描かれているが、その中の一頁、十月は池上のお会式。四角の行灯型万灯には大伝馬妙光連と見え、江戸市から参詣する万灯の風景が当たり前だった時代を、その目で見た人でなければ描けない絵である。

### 15 両面柄付太鼓

明治四十四年

大森町南仲十日講若、明治四十四年十月新調と胴に書き入れてある。大森町南仲十日講は題目講だろう。そこに若の一字があることで、この太鼓が題目講の集まりで使用されただけの物でなく、御会式参詣に用いられたことがほぼ確実である。

若すなわち若連とか若睦と言ひ、上部団体の若者達

で結成した集まりないし若者達を指す言葉である。他所から来る万灯を観るばかりだった地元若者達が、俺たちもやろうじゃないかと講の年寄り連中に掛け合うも色よい返事がない、それじゃあ自分たちでやろう、となり若連を作った—というような感じである。

### 16 お会式図絵葉書

尾形月耕 日本葉書会

明治時代（宛名面の時代判別による）

簡単な作りの万灯が時代を感じさせるが、正直なところパツと見たところ御会式のソレだとは思わなかった。よく見ると団扇太鼓のようなものを手に持つ女性、数珠をかけた人、そう気が付くと後ろの万灯に書かれた文字はお題目のように見えてくる。風俗十二ヶ月というシリーズの一枚だと思いが未詳。

### 17 妙宗御鬮絵鈔

石井宣応校訂

明治二十二年

日蓮宗のおみくじの本だが、霊場案内や諸行事案内まで掲載されている。

## 18 身延山久遠寺年賀状

明治四十五年

身延山久遠寺から信徒と思われる人物に差し出された年賀状。重要年中行事が簡条書きされているの中に宗祖御会式十月十三日に並び宗祖小会式旧十月十三日相当日とある。小会式というのが何なのか分からないが、旧暦相当日ということから、もしかしたら明治になって旧暦新暦のゴタゴタ（御会式（おそらく他の聖日）は新暦の十月十三日か旧暦の十月十三日にやるのか暦が改まった時に採めた。新聞記事によると旧暦合わせにすると決定したが、すぐに十月十三日が御会式となったようだ）があり、旧暦の「本来の日にち」を主張する人たちに配慮する形で生まれた行事かもしれない。

## 19 身延御案内

山田屋旅館

380×130mm

正確な年代は分からないが、明治〜大正期と思われる身延山観光案内。これにも小会式の記載があり、こちらによると「宗祖報恩会（小会式）十一月二十三日」となっている。御会式は「宗祖御涅槃会（十月大会）」となっている。涅槃会と報恩会の違いはよく分からないが、この頃の身延では御会式が二

回あったということは間違いならしい。

## 20 池上曙楼から大森方面遠景写真

130×70mm

明治中〜後期

池上曙楼より写された一枚。遠くに見える屋根は市野倉あたりの家々だろう。大森停車場から池上への道中は雨が降ると泥濘が酷かったという。今では想像すら出来ないが、この写真を見ると納得である。

## 21 池上本門寺御会式記念印絵葉書

明治三十九年（記念印日付）

「明治三十七八年戦役記念・池上本門寺・御会式記念日・明治三十九年十月二十三日」の記念印が押されている。

この前日、十一日には御会式に合わせて戦没者追悼式が行われたようで、この記念印を押したものもある。

## 22 身延山久遠寺御会式記念印絵葉書

明治三十九年（記念印日付）

写真面は「早川ノ釣橋」。宛名面に「明治三十九年十月十三日 第六百二十五回御会式記念 身延久遠寺」の記念印が押されている。

## 23 池上本門寺総門絵葉書

明治〜大正初期（宛名面の時代判別による）

たまたま「會式」の立札が写り込んだことにより撮影時期が御会式直前だと分かるのだが、これは実は偶然でも何でもなくて、御会式参詣客を当て込んで急遽作られた土産物だからではないだろうか。

## 24 池上本門寺絵葉書

明治〜大正初期（宛名面の時代判別による）

手彩色

本門寺を霊山橋から写しただけと思いきや、よく目を凝らすと総門に立札があるのが見え、そこに前の絵葉書と同じ「會式」の字がおぼろげながら確認できる。ただの本門寺絵葉書その一から御会式絵葉書に昇格した瞬間は絵葉書を整理している時、たまたまだった。



## 25 本門寺御会式絵葉書

東京麻布山田写真館内写真通信会

明治〜大正初期（宛名面の時代判別による）

キャプションには「東京風俗十二ヶ月（十月）本門寺御会式」とある。これは毎月の東京の年中行事を題材にして発行された絵葉書シリーズ「東京風俗十二ヶ月」の一枚である。十月は本門寺御会式が見事題材に選ばれている。このシリーズはひと月につき一種の絵葉書かと思いきや、そういうことではなく複数存在しているものもある。例えば七月は両国川開きを題材にしているが、題材は同じで写真が違ふものが複数ある。そのため、十月の本門寺御会式もこれ以外にも存在している可能性がある。あつて欲しい。

## 26 風俗画報増刊 日蓮聖人開帳第六百五十年記念

東陽堂

明治三十五年

日蓮聖人立教開宗第六百五十年記念大会の準備段階から当日の様子までをまとめた一冊。当日は年表にもあるが多くの講が幟旗を持ち参加した。

特筆すべきは準備段階の記録で、第一回中央準備委員会での決定事項として「○万灯 式日ならびに演説会とも東京各講社に交渉して悉皆参向出仕せしめ厳粛に場の内外に装飾して威儀を壯にすること」と、明治

時代の僧侶側と信徒側の関係性を伝えている。

## 27 片瀬龍口寺五重塔新築之図

石版 金洪舎石印

明治時代

龍口寺五重塔は明治三十年から十三年の歳月をかけて明治四十三年に完成。初層は最初牡丹餅結社、二層は橘結社の浄財によるという。（この二講は牡丹餅講で、龍口法難会に難除けの牡丹餅を奉納することを役目とする。）

片瀬は霊跡ということに加え、その立地からも古くから江戸方面の参詣客が多かった。とくに龍口法難会の人出は夥しく、万灯の行列は藤沢駅まで伸びたという。ちなみに江ノ電はその参詣客を当て込んで明治三十五年九月一日に藤沢片瀬間で開業した。

## 28 藻原山出開帳絵葉書

大正四年

印字されたキャプションには「（藻原山御開帳）蓮台渡御（浅草雷門電車通り）」とある。神田八講の幟旗を先頭に神田元講、和合、霊応の各講の名前を確認できることに加え、纏を振っている様子まで写っている奇跡の一枚。

## 29 藻原山出開帳絵葉書

大正四年

キャプションには「（藻原山御開帳）神田平永町神田元講三須安五郎氏宅蓮台入御光景」とある。休憩する蓮台の周りにはお出迎えの一行の幟旗をはじめ、万灯、纏まで見える。この休憩場所となった家の主、三須安五郎氏はキャプション通り神田元講の講元をなかく務めた人物で、各地の日蓮宗寺院への寄進を欠かさず篤信家として知られた。小湊誕生寺境内に藻原寺七十八世雲山日我上人の名が見える碑が建つ。

## 30 藻原山出開帳絵葉書

大正四年

キャプションには「（藻原山御開帳）上野山下松田楼小休光景」とある。日宗新聞社の宣伝車の右に見える幟旗の向きが悪く講名判読できないのが残念。

## 31 小湊山出開帳絵葉書

大正九年

キャプションには「小湊山開帳 大正九年七月 輦台送り大根川岸通過（三）」とある。京橋川に架かる

紺屋橋を一団が通過する様子を定点撮影した絵葉書の一枚。橋の左の建物に小さく「伊勢卯」という文字が見えなければ紺屋橋と確定出来なかった。

### 32 小湊山出開帳絵葉書

大正九年

キャプションには「小湊山開帳 大正九年七月 輦台送り大根川岸通過(四)」とある。前の続き物で蓮台が紺屋橋を渡る瞬間を写している。これが四なのでまだ後ろを写した絵葉書(同様に一と二も)があるはずで、いつの日かお目にかかりたいと思う。

### 33 小湊山出開帳写真

270×210mm 厚紙に印刷  
大正九年

写真下に印字されたキャプションには「聖祖御降誕七百年小湊山開帳(東京浅草幸龍寺ニ於テ) 大正九年七月二十五日芝圓珠寺ヨリ御厨子迎ヒノ各講下谷御成街道通過」とある。次の写真と撮影場所は同じだが説明は異なるのでどちらかが誤りか?

現在の江戸消防記念会所属の組でも使用されているのと同じの意匠の纏が見える。

### 34 小湊山出開帳写真

270×210mm 厚紙に印刷  
大正九年

写真下に印字されたキャプションには「聖祖御降誕七百年小湊山開帳(東京浅草幸龍寺ニ於テ) 大正九年七月二十五日御厨子神田万世橋大通り黒門町通過」とある。

ちょうど路面電車の後方に四天王名をあらわした幟旗が見えるが、これは品川四天王講(後述)の四天王旗である。

### 35 小湊山出開帳写真

270×210mm 厚紙に印刷  
大正九年

写真下に印字されたキャプションには「御宝前 聖祖御降誕七百年小湊山開帳記念(東京浅草幸龍寺ニ於テ) (大正九年七八月)」とある。

### 36 拓殖大学運動会余興絵葉書

大正十五年

〔大正十五年十月三十一日〕東洋協会大学(拓殖大

学)第二十二回記念大運動会の光景 余興」とキャプションにある通り、運動会における余興の様子を写した絵葉書である。それぞれの装束を身に付けた学生の後ろの万灯は四角い簡素な行灯型で、かすかに南無妙法蓮華経と描かれているのを見ることが出来る。花が付けれられていることが特筆すべき点で、この時代には全ての万灯に現在のように垂れ下がる形の花は付いていないので、いわゆる「花万灯」を模していると言える。あえて手間のかかる花を選択したのは見栄えをとったのか、発案者のみぞ知るところとはいえ、なかなか興味深い。

この運動会の余興がどういったもので、何が行われたかは残念ながら知る術がない。当然、何故万灯なのかも不明である。だが、万灯をしようとする発案し、それがこうして実現した背景を考えると、まさしく「東京名物」であると共に、御会式や万灯といったものを誰でもが知る、常識だった時代が確かにあったという事ではないだろうか。

### 37 見付玄妙寺御会式奉灯

150×225mm 折本四頁  
大正五年

見付玄妙寺の御会式で開催された(と思われる)句会の作品集。俳句以外に日付の記載しかないため詳細不明。

38 感領証

390 × 270 mm  
昭和六年

顕本法華宗総本山妙満寺六百五十遠忌にあたり五円喜捨したことに對する感謝状兼領収書。

39 六百五十遠忌甲州身延山参詣案内

富士身延鉄道  
390 × 270 mm  
昭和六年

遠忌法要期間中の割引電車賃の案内に加え、旅館案内、団参の待遇について案内した宣伝印刷物。一団体あたり香資以外に百円以上奉納すると特典あり。ちなみにこの頃の物価は白米十キロが大体一円五十銭である。

40 日蓮聖人と池上

池上本門寺  
昭和六年

六百五十遠忌記念に制作された施本。祖師伝記と池上本門寺略歴がおもな内容。

41 六百五十遠忌報恩参拝記念写真帳

立正護法団  
280 × 190 mm  
昭和六年

熊本県を本拠とする立正護法団が佐賀県の参拝団と合同で行った遠忌参拝旅行の記念写真帳。身延山、池上をメインに東京觀光なども組み込んだ日本横断一大旅行で、一生に一度という思いで参加した人がほとんどだったのでないだろうか。

42 宗祖六百五十遠忌記念 御会式 附 萬燈の由来

池上青年布教会  
昭和五年

御会式には多くの施本が作り配られるが、そのほとんどが寺院案内や祖師伝記、故事を紹介する法話程度の内容で、御会式と銘打っていても報恩感謝の〜という判で押したような、毒にも薬にもならぬ予算消化だけの資源ごみが多い。そんな施本界にあつて唯一と言って良い、ちゃんとした御会式に配るべき冊子。

著者などの記載はないが山上、泉師の筆で間違いないだろう。古今、これだけの御会式解説文を書ける知識のある方はこの時代、この人しかいない。戦前の全国お会式事情などはこの人が書き残さなければ、信仰の火は歴史の風に消えてしまったことだろう。

復刻して本展覧会の施本として配布するのでは非読んで欲しい。

43 日蓮主義 第四卷第十号

昭和五年

山上、泉師の御会式解説が載る日蓮宗公式雑誌。ここでグダグダ説明するより読むほうが早いので少々長いが全文転載する。

御会式の沿革と池上本門寺 山上、泉

今年の御会式は恰も日蓮大聖人の御涅槃から六百四十九年に相丁るので、明年の御遠忌を迎へ奉る。且、晩近、日本電報通信社の主催の下に「お国自慢」を募集するに際し、報知新聞社は先づ東京名物の随一であり、最く股賑を呈する東京年中行事の一として十月の「御会式」を推薦して居る程である。で茲に「夜を昼に団扇太鼓や法の華」の池上を中心として、文藝や絵画に現れた御会式の沿革に就て少しく紹介しようと思ふ。

「会式」とは汎く一般の法会の儀式をさすのであるが、さういふ成語を国文学に求めると、恐らく足利時代以前にはなかつたらしい。

謡曲「九世戸」に、「丹後の国九世の戸は……文殊を勧請の地なり殊に林鐘半ば、彼の会式にて御座候ふ……」など見えるのが古い方であらう。其「会式」は、真言宗の「御影供」、浄土真宗の「報恩講」と同様に、概ね開祖示寂の忌日に営む大法筵をさすのであるが、

何時しかそれが日蓮宗専用語となったことは、祖師と申せば日蓮大聖人に限るやうになって了つたのと異ならない。「御会式」といふ称呼も、最初は「御影供」に倣つて「御影講」と称へ、更に「御命講」と呼ぶやうになつたもので、而も其「命」は「御影」の字音から転化したのだから厳密にいへば「御御影講」の四文字が当てられる。で、俳句では「御影講」と「御命講」とは、

御命講や油のやうな酒五升 芭蕉

菊鶏頭伐りつくしけり御影講 芭蕉

の如く共通に扱われたが、後には「日蓮忌」「御会式」といふ季題も設けられて、

枯原にひゞく太鼓や日蓮忌 鼓竹

一天四海と響くお会式太鼓哉 白蓉

などと吟するやうになつた。何れにせよ、

武蔵野に住みて会式や紙の花 青々

昼過ぎや会式の道のこぼれ花 綿江

とある如く「御会式」の本場は花のお江戸……大東京の初冬を飾る世界的名物で、「紙価、為に貴し」と称するも溢美でない。

然て、新川柳に「本門寺年に一度の手が疲れ」と詠まれた池上本門寺の御会式は、何れの時代から繁昌したかといふことは判然と文献に徴し得ない。が併し寛政三年開板（今を遡ること百八十余年前）の慶記逸の「俳諧武玉川」初編に、

その翌足のたゝぬ池上

と見え、お速夜の雑踏で御正当の十三日にも尚足のやり場がない光景が略知られる通り、二百年以前に於いて既に斯くの如き参拝団の群集で大賑を極めていたことは明瞭である。のみならず、元禄の頃（今より二百数十年以前）でさへ松尾芭蕉に「御命講」の句も

ある程だったから、池上の御会式は其時代に可成りの名物だったに違ひない。

御会式を題材とした狂歌は随分多いが、「古今夷曲集」には有名な今混馬鹿壽が、

妙法ののりの手際にさくら花

是れや小春のよしの紙にて

と詠み、古川柳では「誹風柳多留」に

日蓮は柿と葡萄にあきたまひ

お会式の餅を髪から一つ出し

ぼつたりと散るは会式の桜なり

と口吟でいるのなどが人口に膾炙して居る。

さういったやうな花やかな光景を描写した浮世絵師には、一立齋広重、葛飾北斎、一勇齋国芳、為齋、二代広重、二代豊国、芳虎、国虎、国周、国輝、英泉、周延、一昇齋、小林清親、猩々暁齋其他の名家を挙げられる。

凡そ宗教的の錦絵は、さすがに江戸絵と呼ばれただけあって、大聖人の御一代や日蓮宗関係のものが一番多い。池上、堀之内、雑司ヶ谷、白金、柳島などが殊に夥しい。就中「御会式」は錦絵として相応しい材料だったから、優秀な作品を算へられる。そして、夫等の画家が熱烈な法華信者だったのも、洵に不思議ではないか。

それらの錦絵を見れば、文化文政前後の万灯の変遷も一目瞭然である。二代広重の「身延山開帳朝詣新大橋の図」三枚続の如きは、各講中の目印から服装、十六本の万灯の意匠までが判然として居る。攷古の好資料である。

さて、謂はゆる法華氣質の江戸っ子は、男女の別なく、老若を問はず、それぞれ万灯を振翳して堂々と街

頭へ押出したので、勢ひ衝突もおこり、小競合も生じたであらう。で、天保十二年に行はれた老中水野忠邦の改革の際、その忌避に觸れて万灯を差止められたが、間もなく忠邦が失脚すると共に、旧態に復したと謂ふよりも、寧ろヨリ華々しく大江戸の八百八町を練り廻った。

万灯に纏を用いるより以前には旗幟であつた。旗幟の大きさは、幅が約四尺、長さは二丈、若しくは二丈二三尺に及んでいる。その中央には七字の御題目を囀し、その両端に昇龍と降龍とを描いて、それを金糸で縫ひつづしたものだ。その地は緞子といった類であつた。それを蓮台に仕立て、牛に牽かせ、その前後を経帷子や揃ひの衣裳で団扇太鼓を執つた連中が数珠のように繋がりが群がって行く。或は四天王旗などもあり、又は各自講中の紋様目印などを認めた吹流しのもあつた。そして、身延の開帳の送迎には慣例として神田八講が先頭を承つていたものであるといふ。

さういった幟や吹流しは、おほむね開帳のやうな「お練り」の場合に用いられたのであるが、御会式に際しては、旗幟もあれば大万灯、小万灯、提灯万灯、奉納手拭万灯、仮装万灯などが、桜花で美しく飾られて出るやうになつた。それも、明治十四年の六百遠忌の頃ほひから一層盛んになつたことは、有らゆる錦絵が之を証拠立て、居る。

斯の如く、幾多の変遷を経て、音に名高き「池上の御会式」が世界的名物ともなり、東京年中行事の数頁を彩るやうになつたのである。即ち一年の総決算期たる大晦日にも見られぬ省線、市電、京浜線、池上電車、目蒲線が挙つての終夜運転で参詣の群集を吞吐するといふ豪勢さ。満都の各新聞紙もそのニュースの主要部

分を「御会式だより」の為に提供するのを以て誇りと恒例とするのも、痛快な現象をいはねばならぬ。

……大阪の名優中村福助（梅玉）が浅草鳥越の中村座で「日蓮大士真実伝」を上演し初めたのも実に六百遠忌御報恩のためである。そして純信の彼は、真実の莊嚴心から万灯と会式桜とで劇場を光飾した事績も世に名高いのである。

## 44 日蓮主義 第十二巻第十号

昭和十三年

再び山上、泉師の御会式解説。  
御會式の今昔 山上、泉

およそ江戸時代に於ける日蓮宗に就いては、次のやうな四大特色を数へられたほど豪勢をきはめたものです。その第一は『法華氣質』といふ成語です。その熱烈さから「法華勧めるほど勧めても」といひ、「堅まり法華」といふ諺も生じ、茶道では「情張」（浄玻璃）と称へた茶釜の一種を「法華釜」といふ異名を以て呼んだ。又、川柳の「堅法華惜しい娘を寝かし物」といひ、「堅法華桶町へ転宅し」と詠まれたのも、更にまた私可多咄や落語の「法華猫」、「法華長屋」、「お材木」、「腹中」などでも、皆法華魂を描写した痛快な題材であります。

第二には『お宗旨』と申す語です。ただ一口に「宗旨」といへば、何の宗派にも通ずる汎称であるが、それを一度改まつて「お宗旨」と呼ぶと、我が日蓮宗専用の特殊語となつてしまふのです。即ち「お」の一字の有

無で、さう違つたのである。「お宗旨がみんな指さすいい娘」と申す「俳風柳多留」の名句などが、その証拠で、それを訳すと

お宗旨が（日蓮宗の人々が）  
みんな（異体同心に）  
指さす（唱え奉る）  
いい娘（南無妙法蓮華經）

となります。「お宗旨」を二に『お経宗』とも称へた。それで「テドドの調子へ経の尻上り」などと穿つた川柳の生まれた次第です。

第三には『お祖師さま』です。「大師は弘法に、祖師は日蓮に尊はる」といふ諺でもわかりませう。「三つ蒲団頭へ載せるお祖師さま」といふ川柳は、お会式に赤白三枚重ねたお綿帽を冠せまいらせたお姿のことです。

第四が、謂はゆる『お会式』であり、『お命講』です。これから述べようとするのは、さういふ語の起源や、沿革や、変遷やについてであります。

そもそも『会式』と申すと、汎く一般にわたつての法会の儀をさします。しかし、この『会式』なる成語は、仏教語といふほどのものでなかつたばかりか、室町時代以前、即ち近古には、之を文献に徵めがたいのです。『会式』の語の初出は、観世小次郎の作といはれる謡曲の「九世戸」です。その冒頭に「抑もこれは当今に仕へ奉る臣下なり。さても丹後の国九世の戸は神代の古跡にて、忝くも天竺五台山の文殊を勧請の地なり。殊に林鐘（六月）半ば、かの会式にて御座候程に、唯今参詣仕り候。」と見え。その意味は「多数の信者が会同して、法要の儀式を営むこと。」であつたが、それが自然に、開祖入寂の忌日に行ふ大法会といふ風に

用いられたのです。ですから、各宗祖の涅槃会は、みな『お会式』と申すべきですが、例へば『お祖師様』が日蓮大聖人に限りませんと同様に、『お会式』（又は「お命講」も）といへば、日蓮宗独占の形となつて了つたのです。論より証拠で、之を各宗祖の涅槃会に徴しますれば、大体

(一) 大師講（天台宗）  
(二) 御影供（真言宗）

(三) 御忌（浄土宗）

(四) 報恩講（真宗）

(五) 御会式（日蓮宗）

と称へているので明瞭です。

次に『お会式』は即ち『御命講』ですが、この『お命講』の語は、元来「御影供」に倣つて「御影講」と呼び、更にその「御影」（ミエイ）を呉音でミエウと呼ぶところから「命」の字を当てて『お命講』（オミヤウカウ）としたのです。故に、今より二百数十年前に在つては、お命講や油のやうな酒五升 芭蕉  
御影講の花のあるじや女形 大祇  
菊鶏頭伐りつくしけり御影講 芭蕉  
上京や月夜しぐるるお妙講 几童  
といふやうに「お命講」「御影講」さては「お妙講」などと様々に書いたものです。それが俳句の新しい季題となつては、「日蓮忌」・「会式」の語が生じて

松原にひびく太鼓や日蓮忌 鼓竹  
かけて今日をがまんたらや日蓮忌 諫元  
昼過ぎや会式の道のこぼれ花 錦江  
武蔵野に住みて会式や紙の花 青々  
などと詠ぜられています。

さて、今日に於いては、所謂『お会式』は全国的、否、

世界的の行事となり、随つて、名物の万灯も到る所で見られますが、しかし、何といつても『お会式』の本場は、聖祖鶴林の霊蹟を有つ花のお江戸であり、関東地方であることに変わりはないのです。蜀山人の歌に、  
家々に飾る小春の造り花

としやお祖師の御影講中

とあるやうに、江戸市中の家々では、桜の造花を飾り、お木像には赤白三枚重ねの綿帽子を冠せまいらせられたことが「近世風俗志」や「江戸歳時記」に予つて知られます。今日でも、大東京の初冬を飾るお会式万灯は世界的名物の一であり、お会式の電車が終夜運転などといふ光景も、大晦日以外には容易に見られない図であります。

新しい川柳に「本門寺年に一度の手が疲れ」と詠まれている池上本門寺の御会式は、何れの時代から斯くも繁昌を呈したかといふことは判然しない。けれども、寛政三年開版（今から丁度百四十八年前）の慶紀逸の「俳諧武玉川」初編に、  
その翌足のたため池上

と見え、お速夜の雑沓で、御正當の十三日にも尚参詣人の足の踏場がない有様がほぼ窺はれるのです。其頃吟ぜられた俳句にさへ、

お命講や谷も埋まる切草鞋

といふのがある。そればかりでなく、元禄（今より二百三十四年前）時代において、松尾芭蕉に「お命講や油のやうな酒五升」の名句があつたほどですから、名にし負ふ池上の御会式は、既にその時代から相当盛んであつたことが信ぜられます。

次に、御会式を題材とした狂歌も多いが、「古今夷曲集」には、有名な今混馬鹿壽が、

妙法ののりの手際にさくら花

これや小春のよしの紙にて

と詠じて居り、古川柳としては「俳風柳多留」に、

日蓮は柿と葡萄にあきたまひ

お会式の餅を髪から一つ出し

ぼつたりと散るは会式の桜なり

と口吟んでいるのが人口に膾炙しています。又奇抜な觀察から成つたものとしては、天明時代の作に、

万灯持おつたて時すこいそぎ

とある。「すこいそぎ」とは、大万灯が重いので之

をたてる時に少し前のめりに急ぐやうになることです。又、

万灯持生れもつかぬ歩きやう

といふ秀句は、宝暦頃の作です。明治時代の句には、

夜を昼に団扇太鼓や法の華

とあつて、皆池上の御会式を主題としたものです。

池上については、近郊に聞えた堀の内妙法寺の御会式が盛大であつたことは「江戸名所図会」・「本化道場記」等で知られ、「江都近在所名集」には「堀の内厄除の祖師、近來繁昌」と見えます。十返舎一九の狂歌

に

堀の内といへど水キア見えないが

お堂の中はただぶだぶだぶ（金の草鞋）

と申すのがあり、「俳風柳多留」などには、

鳴子道冬も会式の花見連（文政の句）

馬の耳題目を聞く四谷道（文化の句）

十三日馬糞ふみふみだぶだぶ（文化の句）

など見え、明治になつてからも、

通者四五丁知れる御命講

といふのも見出されます。

さうした御会式の華やかな光景を描いた浮世絵師には、広重、北斎、国芳、為斎、豊国、芳虎、英泉、国周、周延、新しい所では芳年、清親、曉斎、其他の名流を挙げられます。『御会式』は錦絵としては好個の材料だつたから、優秀な作品があり、それらの画家は揃ひも揃つて法華信者であつたのも愉快ではありませんか。

斯の如く『法華氣質』の江戸ッ児は、所謂『お宗巨』なることを誇とし、それぞれ万灯を振翳して堂々と八百八町を練歩いたので、自然に衝突もおこり、小競合も生じた。で老中水野越前守忠邦の天保十二年に行つた改革には、万灯も纏も差止められましたが、間もなく忠邦が失脚すると共に、旧態に復し、以前よりは却つて華々しく街頭へ押出したことは、いづれも錦絵によつて証拠だてられています。

御会式の万灯は、大万灯、提灯万灯、奉納手拭万灯、仮装万灯、其他で、桜の花傘で飾られますが、昔は旗幟が殊に多かつた。明治十四年の六百遠忌の頃から、ますます盛んとなつて、東京年中行事の一頁を彩るやうになり、満都の各新聞紙もそのニュースの主要部分を「お会式だより」のために提供するものが恒例となつて、いつしか世界的名物の名をほしいままにした次第であります。

## 45 池上本門寺全図

190×145mm

昭和六年

本門寺鳥瞰図の裏に六百五十遠忌の案内があることから、宣伝目的で制作された配布物だろう。遠忌法要は一期と二期に分かれて法要内容が列記されている。「大法会中連日 京浜間諸講社万灯行列」の文字が輝かしい。

#### 46 日蓮聖人御一代図絵

池上本門寺  
昭和六年再版

初版発行は昭和四年とあるので六百五十遠忌に合わせて遠忌記念の文字を追加したと思われる。

#### 47 原木山報恩塔絵葉書

五枚・タトウ入り  
昭和六年

六百五十遠忌記念事業の記念絵葉書。

#### 48 本山妙覚寺絵葉書

七枚・袋入り  
昭和六年

宗祖六百五十遠忌記念と袋にあるが中身は至って普通の寺院絵葉書。枚数的に一枚足りず八枚で揃いでないかと思われる。

#### 49 花やしき特別割引券

75×95mm  
昭和六年

中山法華経寺の六百五十遠忌は四月と十一月の二期に分かれているが、本券の有効期間が十一月の御会式（大法要期間）二日前から十一月末までとなっていることから、十一月の御会式前から関係者に配布されたものと思われる。それにしても中山の御会式記念に浅草で割引とは何らかの関係があるにしても面白い。

#### 50 花やしき絵葉書

三枚・袋入り  
昭和六年

おみやげ高祖日蓮大聖人六百五十遠忌記念と袋に印刷された三枚組の絵葉書。祖師像のものには「花やしきノ大日蓮御尊像」とあるので花やしきに祀られていたのだろうか？ 詳細不明だが、前の特別割引券の存在といい、経営者ないし上層部に信仰されていた方がいたのは間違いないのではないだろうか。

#### 51 立正大師日蓮上人レリーフ

135×180mm  
鉄製  
昭和時代

六百五十遠忌の記念品として制作・配布された。古い家などでは戦前からの仏壇に飾られたままになっていることが多いのか、現存数も多い。

#### 52 目蒲・東横電車チラシ

150×210mm  
一九三〇年代

二子玉川―大井町間の開通が昭和四年なのでその後、おそらく昭和六年の六百五十遠忌前後の盛り上がり当て込んだチラシだと思われる。下丸子から乗合自動車というルートが時代を感じさせる。

#### 53 東京名物御会式まんどろ絵葉書（袋）

大正〜昭和初期（宛名面の時代判別による）

61までの八枚が入っていた袋。おそらく八枚で揃いだと考えられる。残念ながら発行元に関する情報は一切ないが、撮影された場所から推測するに池上本門寺の周辺ないし、大森あるいは品川辺りの商店発行の可

能性が高い。発行年は宛名面の発行年代判別により大正七年〜昭和七年であることは間違いないが、昭和六一年に六百五十遠忌をむかえていることを考えると、おそらくこの前後であろう。

#### 54 まんどう出発の光景絵葉書

大正〜昭和初期（宛名面の時代判別による）

幟旗にかすかに大井妙法講と見える。おそらく現在の大井町から大森駅の途中あたりの講で、池上通りを歩いて行く出発の光景だと思われる。

#### 55 御会式まんどう絵葉書

大正〜昭和初期（宛名面の時代判別による）

上から四角四角六角の三重塔型万灯で現代でもそのまま使用されていそうな立派な万灯。

#### 56 御会式まんどう絵葉書

大正〜昭和初期（宛名面の時代判別による）

二層六角行灯型万灯。よく見ると「新宿結社」とあるが、どこの新宿かは不明。

#### 57 若者連まとい振り絵葉書

大正〜昭和初期（宛名面の時代判別による）

蒲田一心会の万灯。残念ながら現在では名前を聞かない講。

#### 58 御会式まんどう絵葉書

大正〜昭和初期（宛名面の時代判別による）

獨信講の古典的な行灯型万灯。残念ながら現在では名前を聞かない講。

#### 59 子供連まんどう絵葉書

大正〜昭和初期（宛名面の時代判別による）

詳細不明だが子供だけで構成されている。おそらくは〇〇講の若者で構成された〇〇講若連のように、さらに子供だけの〇〇講子供連というところか。

#### 60 御会式橘まとい絵葉書

大正〜昭和初期（宛名面の時代判別による）

井桁に橘の陀志（纏の頭部のこと）を用いた纏の絵

葉書である。馬簾は和紙を固めたものだろうか、使い込まれてボロボロになっている。形は現在も多く見ることが出来る纏の基本形とでもいうべきものだが、井桁の側面に「池」「表」の二字が刻印されているのが特徴である。この文字が見えたことで、この纏がどのものか判明したので、正面から撮影してくれたことに感謝しなくてはならない。

池表、すなわち池上表門前のことで、これは池上本門寺門前町の題目講「池上表門前」をあらわしている。実際にこの纏を使用したのは題目講の若者たちで結成された万灯講「池上表門前若連」で、この池上表門前若連は戦火により衰退し、戦後おなじような境遇だった北門前若連という題目講の若者万灯講と合併する形で、現在の本睦会（池上大坊本行寺取り持ち）になっている。

#### 61 まんどう集合の光景絵葉書

大正〜昭和初期（宛名面の時代判別による）

絵葉書のキャプションは「まんどう集合の光景」とあるが、集合して出発するところということではなく、おそらく本門寺大堂手前の光景だろうと思われる。右の万灯の提灯には「あづま会」とあるが、残念ながら現在ではその名を見ることができず詳細不明である。

## 62 日本風俗年中行事絵葉書

十二枚・袋入り 手彩色  
大正〓昭和初期（宛名面の時代判別による）

キャプション「OCTOBER THE THIRTEENTH OF THIS MONTH IS THE CELEBRATION OF NICHIREN'S ANNIVERSARY, FROM MORNING THROUGH THE NIGHT, THE BELIEVERS MORE THAN HUNDRED THOUSAND FROM TOKYO AND YOKOHAMA VISIT A TEMPLE (HONMONJI IN Ikegami, Tokyo PREFECTURE) WITH DRUMS AND PAPER LANTERNS」  
とある。

日本風俗年中行事と題されたシリーズの一枚だが、ご覧の通り英語のキャプションしか印字されていない。そのことから分かるが、輸出用ないし外国人のお土産用として製作されたようで、一月から十二月を代表する日本の年中行事が手彩色を施した写真と英語で紹介されている。まさしく御会式が東京名物を通り越して全国に名の知れた年中行事のひとつであった証拠と言えるだろう。

それぞれの絵葉書内容は次の通り。

- 一月 羽根突き
- 二月 初午
- 三月 ひな祭り
- 四月 花見
- 五月 端午の節句
- 六月 祇園祭
- 七月 七夕
- 八月 十五夜

九月 菊まつり

十月 御会式

十一月 西の市

十二月 餅つき

## 63 身延別院立正閣御会式絵葉書

大正〓昭和初期（宛名面の時代判別による）

身延別院立正閣（長野県岡谷市）の御会式記念絵葉書。よく見ると画面右下に白い箱が並んだ箇所がある。さらによく見るとそれぞれの箱には棒がついていて、上部には傘のようなものまで見える。おそらく檀信徒が一人ひとつずつ手に持ち練り歩いた万灯だろう。現在でも自分たちのお寺単独で小規模ながら万灯を出し…という御会式はあるが、その形はこの時代にすでにあったという貴重な証明である。

## 64 太鼓図絵葉書

川本四郎

昭和初期

趣味人自作絵葉書。太鼓店のいわば公式名は両面柄付太鼓というが、俗に両面と詰めて言う。また、（これは混同されているが）この太鼓を指して団扇太鼓と言う場合も散見される。飴屋の太鼓としても知られて

いるが関係は不明。

## 65 池上本門寺参拝記念絵葉書

八枚・タトウ入り

昭和八年（スタンプ日付）

絵葉書自体は何の変哲もないよくある寺院参詣土産（実際に池上本門寺土産として販売されていた）の域を出ず、画像も珍しくないで価値はないが、この絵葉書を当時購入した人が加えたひと手間により、素晴らしい宝物に昇華した。切手を貼って押印、タトウには朱印をもらっている。この絵葉書を購入した人は昭和八年十月十二日に池上の御会式に参詣した。その揺るぎない事実がスタンプの日付として現代に残る唯一無二の絵葉書。

## 66 松竹少女歌劇レビューお会式レコード

コロムビア ヴィヴァ・トータル レコード

安東英男作詞 佐藤清吉作曲 奥山貞吉編曲

昭和十年

松竹少女歌劇レビュー「秋のをどり」主題歌。オリエ津阪は男装の麗人として人気を博し、松竹少女歌劇黄金時代を築いた一人。

67 妙法寺参詣案内

220×150mm 三つ折り

昭和時代

この頃（おそらく昭和二桁）の御会式は八日から十三日と年中行事案内にある。

70 万灯傘

竹

昭和時代

傘問屋で「万灯の傘」と言つて通じた時代があつたようで、これは浅草の傘問屋に最後の一本として在庫してあつた物。番傘の骨部分を三本まとめて作ることで花をつけやすくしている。ただあくまで番傘の改良品であるので強度はそれほどではなく、現在の万灯の主流となっている、下まで垂らすような花の重量には耐えられない。

68 勅額拝戴宗祖六百五十遠忌要録

昭和十一年

六百五十遠忌は昭和六年だが何故発行が五年も過ぎてからなのかという言い訳が巻頭を飾る。早い話が忙しくて誰もやってなかつたということらしい。発行までに時間が掛かつたこともあり、この後の七百遠忌に比べると記録が薄い。

71 日蓮上人生誕七百五十年記念千社札

木版

昭和四十六年

昭和四十六年は日蓮聖人降誕七百五十年の年にあたり、これを記念して例会（千社札・納札交換会）の題材とした。

69 愉快的な合唱曲集

森儀八郎編

昭和二十一年 白眉社

林柳波作詞、本居長世作曲の御会式行進曲掲載。

72 千加坊千社札

木版

昭和時代

73 神田八講千社札

木版

昭和時代

本名福田近一。はじめ千嘉坊と名乗っていたのを後に千加坊と改名した。千社札の世界で名前が知られる以外にも神田明神宮鍵講元としても知られ、背中に入れた文身は日蓮聖人という江戸の錦絵になりそうな人物。墓所は堀之内のお祖師様にあるというから完璧である。  
池上本門寺にある神田八講の奉納による六百五十遠忌記念碑には神田市場講に千嘉坊として名前が見える。（ちなみに神田市場講の隣が東都納札睦）

神田八講とは講の連合体とでもいうべきもので、諸寺だけでなく日蓮宗自体にも大きく権勢を誇っていたようで、大きな記念行事や開帳など日蓮宗側が事前に協議するような関係だった。その歴史も古く、「日蓮宗高僧傳」に詳しいので、神田元講の項より引用する。  
神田元講 講元は神田区平永町三須安五郎氏なり。此講の起りを記さんには、先づ神田講の起源を知らざるべからず。徳川八代將軍吉宗の代、公然江戸市内に出開帳を許るされたるは身延山、嵯峨釈迦、成田不動、三所に限られたり。仍て同治世中に初めて身延山開帳を江戸に執り行ふにあたり、江戸市民挙て旅所品川海徳寺に出迎へたり。其人多数りに多き為め混乱甚しく取鎮に困りたるの結果、取締りを設くるの必要を生じ、夫れには出迎人中神田市民最も多数を占め、且つ信者

も亦多ければとて、終に神田の人を以て其取締に萃ぐることとなれり。然るに其目標となるべきものの必要あり、去りとてつかの間に何物も調ふこと能はず、やむを得ず芝三田の三河屋と云ふ煙草屋の暖簾を借り受け、胡粉にて神田構中の名を認め、出迎の人々は尽く此暖簾を目印として従ひ来れと命じ、漸く其混雑を鎮めたり。これ則ち講社の因を為したるものなりと云ふ。ここに於いて神田元講を起し、以来開帳送迎の場合には道案内として第一番に神田柿色旗を立てて先に立ち、それに従て江戸各講社は順々に行列に就くことと定めたり。元は内、外、東、西、神田一団体なりしも、追々信者も増し従て講社も数多出来たれば八講となり、時としては十四五講ともなりたることあれども、最初八講を以て団体を組織したるに依り、講の多少を問はず八講の名を因襲し居るなり。

前記の如く神田講は送迎とも行列の先頭となれども、町同心十八人靈龜に付て神田講の先列となるは言ふまでもなし、柿色旗も今の如く豎旗なく暖簾そのままの横旗を用ふる慣しなりしも、後になりて縦の物に改めたり。若し他講中にて柿色旗を作るか、又は新講社の出来る場合は、神田講の承諾を受け、且つ其指図に依て行列の順に立つことは今も昔に変わるることなし。

神田八講と改め、講中の統一を謀りたるは、明治三年に元講、前の講元神田三河町村上米治氏先々代及び十三日講、前の講元日本橋区本石町三丁目三宅兵右衛門氏先代の尽力に由て組織し、左の順序にて行列に立つこととなれり。送迎共以上の事実なるより、今日諸山の開帳は必ず神田八講、東京八講、東京十講にて万端の世話することは昔日に異ならず。

## 74 浅草三講千社札

木版

昭和時代

浅草あたりの三つの講の連合体で三講という名乗りのはずだが、残念ながらそれぞれの講名は明らかになつていない。ただ三講としての奉納物は現在でも残されていて、柴又帝釈天題経寺玉垣、身延山発軫閣玉垣の他、発軫閣向かい側の茶堂と赤沢宿には講中札が掛けられている。

## 75 銅清千社札

木版

昭和時代

品川四天王講の纏（井桁に橘で橘部分が回る）作者の千社札二種。四天王講については縁起が残されているので紹介する。

品川四天王講縁起

長興長榮両山三十三代日謙上人の御世、征夷大將軍十一代徳川家齊公の御世、天明八年四月十三日より六十日間、江戸浅草法養寺に於て、大本山本門寺の祖師旅立日蓮大菩薩の御像の御開帳を執行せり。右終て徳川將軍の御内意に基き、御城中に迎へて御開帳を執行することになれり。

六月廿九日、御尊像御城へ上るに付き、江戸諸講中

の送りは法養寺より見附までにて別れ、其より行列八御老中月番板倉左近將監殿、御出役人本多定兵衛殿の案内にて、伴僧二人、侍二人、祖師御長持二人、四天王旗四人、靈寶御長持四人、臺持、挟箱持、合羽籠持、僧俗合計廿八人にて二の丸へ上り、夫より御本丸へ進み、更に二の丸へ移り、七月廿二日まで毎日御開帳を奉行し、其乃翌廿三日閉帳退城に付、城中の行列八上りの時と全人数にて、見附より江戸諸講中御迎へ申し上げ、法養寺に奉安せり。其時城中にて一同に白強飯の供養ありと云ふ。

右御城中御開帳の送迎に四天王旗を随従せしむるにつき、寺社奉行の御尋ねあり、本門寺役者観理院より池上本門寺の祖師の御像を送迎するに、四天王旗を以て左右を擁護するハ、古例なりと御答へ申せしといふ。依りて江戸諸講中の旗は見附限りにて御別れ申せし独り品川の四天王旗のみハ城中二入る事となれりといふ。此の事ありてより、品川の池上取持講は品川四天王講と改称し、尔来池上御祖師江戸にて開帳の節ハ、芝の蓮臺講と共に尊像の四方に随する事となれりといふ。

前記の由緒に依り、当品川四天王講と本門寺との関係は、一般諸講社と自ら異なる事情あるにより、本門寺より特に表門此経難持坂の上に、当講社の休息所を建設することを許されたり。今現に平素一般参拝者の茶呑所とせる建物是れなり。

右縁起ハ当講社に古記録として存せり、年月の久しき破損或ハ紛失せしに依り、今般改めて本門寺の古記録及当講社員古老の言ひ傳へを総合して是れを記する処なり。

大正十三年三月 品川四天王講

## 76 浅草開運睦講千社札

木版

昭和時代

浅草開運睦講の名前は「42宗祖六百五十遠忌記念御会式 附、萬燈の由来」に神田八講のひとつとして書かれていて、池上本門寺にある神田八講の奉納による六百五十遠忌記念碑にも神田八講のひとつとして講名を連ねている。ただ大正元年発行の「日蓮宗高僧傳」には神田八講のなかにその名前を見ることができない。しかし、諸講中のなかに浅草開運講という名前がある。それによると柳島妙見を本拠とする講で明治初年の創立になるという。

## 77 御会式御札千社札

木版

昭和時代

井桁に橘紋に芝の字を見ることができ、実際に芝あたりの御会式に手伝わってもらったお札として制作されたというようなものではなく、おそらくは納札（千社札）の交換会のお題が御会式にまつわる物だったり、時季がそれだったりということにちなむ洒落であろう。

現在の東京都港区からは想像もできないが、芝は古くから江戸の法華信者の多い地域だった。品川など近

隣地域の法華寺院が火事の被害にあうと復興に尽力したのは芝の講中だったし、芝蓮台講という有力な講はその名前の通り出開帳の度に祖師像を載せる蓮台を用意する役目を担った。

この千社札にまつわる人物や講は残念ながら不明だが、おそらく井桁に橘紋に芝という組み合わせの代紋を袴纏や提灯に用いた講が実在したのは間違いない。

## 78 本門寺御会式往復乗車券

東京急行電鉄

昭和三十八年

御会式参詣者用に限定発売された蒲田⇨池上間の往復乗車券。裏面に「通用御会式当日限」とあるが、これが十二日限定だったのかは不明。

池上線誕生以前から御会式参詣客を当て込んだ特別割引の乗車券は繰り返し発行されている。その歴史は古く、読売新聞明治十四年九月二十八日発行の朝刊には「○来月七日より十三日まで池上本門寺のお会式につき、参詣人の便利の為め新橋、神奈川、横浜の三停車場より大森まで値下げの往復切手を発行になり、且十二十三の両日は新橋と大森の両方より臨時汽車を発車になります。」と案内されている。これより古い記録は見つからず明治十四年はちょうど六百遠忌にあっているの、これを契機としてはじまったのかもしれない。

## 79 日蓮大聖人とともに

日蓮宗大阪府宗務所

昭和五十五年

日蓮聖人第七百遠忌御報恩大会記念誌。各地で順次行われた七百遠忌記念行事に際して同じような記念誌が発行されている。そのうちの一冊。

## 80 日蓮聖人第七百遠忌記念入場券・乗車券

静岡鉄道管理局

昭和五十六年

裏面には絵の解説文。なお静岡鉄道管理局は同じ様式で写真を変更した日蓮正宗版（富士駅）を、大石寺の御会式に合わせて発行している。

## 81 身延山久遠寺大本堂入仏落慶記念絵葉書

四枚・袋入り

昭和六十年

古くから遠忌を契機として堂宇の整備や記念事業を行うことが通例で、そういった記念事業の数だけ記念品も作られた。これもそういった性質のもので、参列者等に配られた。

身延山久遠寺大本堂は昭和五十五年起工式、翌年（七百遠忌）上棟式、昭和六十年五月六日に落慶法要が行われた。

## 82 日蓮聖人展図録

日蓮聖人門下連合会・読売新聞社  
昭和五十六年

七百遠忌記念で開催された展覧会図録。大阪・阪神百貨店、東京・上野松坂屋、九州・小倉井筒屋と巡回した。

## 83 池上新聞

東京ローカル新聞社  
昭和五十六年九月号

地元の万灯講の関係者がそれぞれ自分の講を紹介する企画の一回目で、徳持若睦会、市野倉一心講、池上堤方結社が紹介されている。基本的には外部の人間が知ることなどまずない万灯制作の苦労話など、当事者にしか語れない内容ばかりで大変貴重。

なお、本紙は池上堤方結社の紹介文を書いた吉田隆次氏旧蔵品。

## 84 日蓮大聖人第七百遠忌記念品

七百遠忌記念品の詰め合わせ。封筒に池上巖定院・鬼子母神堂とあるが、それぞれの発行元は本門寺なので本門寺で制作したものを各寺院が用意（購入）して配布したのだろう。

## 85 法華ひらく 第七百遠忌プログラム

池上本門寺  
昭和五十六年 B5判

正当会と前会のプログラム。各法要の式次第を掲載する。

## 86 日蓮大聖人第七百遠忌リーフレット

池上本門寺  
昭和五十六年 A4判二つ折り

七百遠忌正当会と後会のリーフレット二種。万灯練供養のスケジュールの下に参加日の事前連絡を求める一文が掲載されているのが特筆すべき点で、一般配布の他にも池上本門寺から各講への御会式の案内にも同封して使用された。

## 87 日蓮聖人第七百遠忌記念色紙

金子日威  
昭和五十六年 印刷

七百遠忌時点の日蓮宗管長・池上本門寺貫首の記念色紙。直筆ではなく記念品として印刷されたもの。

## 88 法華ひらく 日蓮大聖人第七百遠忌要録

日蓮大聖人第七百遠忌報恩奉行会  
昭和五十七年

参詣万灯講まで一覧になっており、七百遠忌に様々な形でかかわった人への敬意を感じる一冊。

## 89 すすきみみずく

すすき  
平成時代

すすきでみみずくを作り売れ、という鬼子母神の夢告により貧しい母娘が救われたという故事に因む、古くから知られた雑司ヶ谷鬼子母神土産。  
以前は御会式の時に露店で販売されていたが、最近では参道にある雑司が谷案内処でも販売されている。

※鬼子母神の「鬼」の字は正しくは一画目の角がない

90 池上本門寺御会式テレホンカード

御会式に販売されていた記念テレホンカード。写真は本門寺の御会式ボスターの使い回しが多い。

91 臨時乗換乗車券

東急バス 京急バス

御会式に伴う交通規制によりバスが本来のルートで運行できないため、一部の路線は規制区間を自分で歩く事で運賃そのまま乗り換えることが出来た。その際に利用する乗車券。

92 絵入り官製はがき

池上本門寺最寄りの千鳥郵便局で制作された御会式土産。想像で描かれたものでなく、実在のものを元に描かれているところが素晴らしい。

93 篠笛

田中佑吉作  
竹 五本調子  
平成時代



いつから万灯の太鼓に篠笛が付き物になったのか、それを明らかにした史料は残念ながら存在しないため定かではない。しかし、現在に至るまでおもに祭囃子の笛を担う人物の手により継承されていることが多いことから、各地域の祭囃子の成立や発展の歴史と無関係とは考えられず、さらなる調査研究が待たれる。この篠笛の制作者も自身が祭囃子の笛の担い手で、法号（抱月院玉笛日佑信士）をつけた当時の池上養源寺住職によると「玉笛というのは良い笛の音色」という意味とのこと。

94 纏

最近見ないと思っていたら解散していたらしく、中古市場に流出していた六番睦の纏。

六番睦は大田区を本拠とし、池上本門寺のほか南品川天妙国寺、地元の梅屋敷大林寺の御会式などに参詣していた。

お寺と密接な関係がある講以外、道具類も個人宅で保管されていることが多く、残された家族の無関心等により継承が上手くいかない場合、歴史の闇に消え所在不明となるケースが大半である。そういう意味では、ここに流れ着き、記録出来たことは幸いだった。

(未展示)  
※ 手ぬぐい



# 御会式展

二〇二三年十月十一日発行

二〇二四年四月十五日電子書籍版発行

編集

御会式文化研究会

制作・発行

合同会社万灯

願以此功德 普及於一切  
我等與衆生 皆共成仏道

2019年	平成三十一年・令和元年	十月十二日夜関東地方を台風十九号が直撃、池上本門寺御会式中止される
2020年	令和二年	二月二十一日、池上本門寺、新型コロナウイルス病魔退散疫病退散大祈願会並びに百万遍唱題祈願を修す。祈りは通じることなく感染拡大。この年より全国的に諸行事の中止・縮小相次ぐ。池上本門寺御会式史上初の二年連続中止
2021年	令和三年	全国社寺の祈祷も虚しく新型コロナウイルスの猛威は止まず諸行事の中止・縮小相次ぐ。池上本門寺御会式史上初の三年連続中止
2022年	令和四年	十一月八日梅屋敷大林寺御会式、ほぼコロナ以前の形で行われる
2023年	令和五年	御会式展開催される
2024年	令和六年	
2025年	令和七年	
2026年	令和八年	
2027年	令和九年	
2028年	令和十年	
2029年	令和十一年	
2030年	令和十二年	
2031年	令和十三年	日蓮聖人第七百五十遠忌
2081年	令和六十三年	日蓮聖人第八百遠忌